# KAGUYA Planet

No.0
2023.12

## 月特集


大木芙沙子「二十七番目の月」
赤坂パトリシア「Linguicide,[n.] 言語消滅」
高山羽根子「種の船は遅れてたどり着く」
佐伯真洋「月へ帰るまでは」
レビュー　堀川夢
コラム　鯨ヶ岬勇士／齋藤隼飛
インタビュー　池澤春菜


KAGUYA Planet

# 定期購読者募集中

KAGUYA Planet

## ウェブで読む SF短編小説

毎月SF短編小説やインタビューなどを無料で配信中！
月500円で会員登録をすると、約一ヶ月の先行公開期間にコンテンツを読むことができます。

### 書き下ろし SF 短編小説

赤坂パトリシア、揚羽はな、オーガニックゆうき、王谷晶、大木芙沙子、北野勇作、佐伯真洋、坂崎かおる、高山羽根子、なかむらあゆみ、蜂本みさ、久永実木彦、藤井太洋、冬乃くじ、正井、宮内悠介、麦原遼、他

### 翻訳 SF 短編小説

アヴラ・マルガリティ、ジェーン・エスペンソン、ジョイス・チング、トシヤ・カメイ、ユキミ・オガワ、D・A・シャオリン・スパイアーズ、L・D・ルイス、R・B・レンバーグ

### 連載・蜂本みさ

### インタビュー

池澤春菜、大森望、勝山海百合、名倉編、林譲治、春暮康一、宮内悠介、宮澤伊織

予告

## 特集「気候危機」

| | |
|---|---|
| 2024年1月 | 翻訳作品 |
| 2024年2月 | 公募作品 |
| 2024年3月 | 津久井五月 |

Kaguya Planet

https://virtualgorillaplus.com/kaguyaplanet/

【特集】月

大木芙沙子「二十七番目の月」
妻はけっして、足の爪を切っている姿を見せなかった。 4

赤坂パトリシア「Linguicide,[n.]言語消滅」
ある日突然、世界中から〝日本人〟が消えた――。 14

高山羽根子「種の船は遅れてたどり着く」
歴史の中でいなかったことにされた女性たちの物語。 22

佐伯真洋「月へ帰るまでは」
そこは〝植物船〟が行き交う世界。船は都市となっていた。 28

創作

ブックレビュー・堀川夢 38

バゴプラライターズルーム・齋藤隼飛／鯨ヶ岬勇士 40

【インタビュー】

池澤春菜 44

KAGUYA Books

Kaguya Booksから好評発売中！

# 地域SFアンソロジー

1200 年の都？　いえいえ、わたしたちの棲む町。お寺も妖怪も出てこない、観光地の向こう側の京都をお届けします。

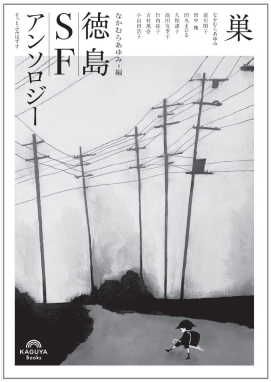
井上彼方編
織戸久貴、鈴木無音、千葉集、野咲タラ、溝渕久美子、麦原遼、藤田雅矢、暴力と破滅の運び手
A6 ／ 240 頁／ 1500 円＋税

## 京都SFアンソロジー ここに浮かぶ景色

大阪を知る 10 名が語る 2045 年の大阪の物語。そこにあるのが絶望でも、希望でも、このまちの未来を想像してみよう。

正井編
青島もうじき、北野勇作、玖馬巌、玄月、紅坂紫、中山奈々、藤崎ほつま、牧野修、正井、宗方涼
A6 ／ 242 頁／ 1500 円＋税

## 大阪SFアンソロジー OSAKA2045




全作、徳島が舞台。
全作、そ (S) っとふ (F) みはずす。
徳島で暮らす７人の女性作家らが描く徳島の日常とその余白。

なかむらあゆみ編
小山田浩子、久保訓子、髙田友季子、田中槐、竹内紘子、田丸まひる、なかむらあゆみ、前川朋子、吉村萬壱
A5 ／ 172 頁／ 1800 円＋税

## 巣徳島SFアンソロジー

# Kaguya Planet

0号

2023年12月

## 特集 月

KAGUYA
Planet

# 二十七番目の月

大木芙沙子

カバーデザイン　VG プラスデザイン部

妻は足の爪を切っている姿をけっして見せてくれなかった。

そのことについて、夫である楽々佐一（さささいち）は何も思っていなかったわけではない。大学の同窓だった彼女とは、卒業して、就職して、二十六で結婚した。結婚して二年、付き合っていた期間もふくめれば、もう十年一緒にいることになる。今では妻のすきな曲、つけている香水、かかさず聞くラジオの番組、友人の顔ぶれ、幼いころ飼っていたハムスターの名前、行きつけのコーヒーチェーン店、苦手な天気、寝る前にする柔軟体操の手順、緊張すると唇を尖らせる癖、それに妻自身からはぜったいに見えない耳たぶの裏のホクロまで、佐一はくまなく知っていた。だからむしろ不思議だった。どうして妻が、足の爪を切るところを見せてくれないのか。

そもそも妻の足の親指を、佐一は見たことがない。厳密には、左足の親指。右足の親指は何度も見たことがある。ほかの四本よりふっくらとしたその指には四角いちいさな爪がついている。自宅ではスリッパも履かずに裸足でいることの多い妻の足の指を見ることは、同居していればそう難しいことではない。でも左足の親指だけはべつだった。妻は左足の親指に、つねにカバーをつけていた。昼夜を問わず一日じゅう。学生時代からずっと。

それ、と佐一はわりとはやい段階で彼女に訊いた。それ、なんで親指にだけ？

デリケートな話題かもしれないから、軽率にふれないほうが無難だろうかとも考えた。でもずっと妙な気を遣われるのも、彼女

だって嫌だろう。それに、たとえその中身がからっぽでも、呪詛のタトゥーで真っ黒でも、ドロドロに溶けかかった緑色でも、佐一は平気だった。平気な顔をしようときめていた。しかしいちおう、こう付け足した。言いたくなければ、もちろん言わなくたっていいんだけれど。

うーん、と彼女は言った。大学近くのカフェのテラス席だった。五月の終わりで、外の席にすわるにはすこしばかり暑すぎた。彼女の九本の足の爪は蜜柑色に塗られ、左足の親指にはそれとよく似た色のサテン地のカバーがかぶせられていた。口のところにゴムが通され、外れにくいようになっているそのカバーは、シチュエーションによって素材が変わった。服に合わせてなのか、色のバリエーションも豊富だった。一本だけカバーをつけられた親指は、ナイトキャップをした赤子のようにも、布袋をかぶせられた人質のようにも見えた。サンダルの足先をぶらぶらさせて、汗をびっしりかいたアイスコーヒーのグラスをなでながら、彼女は「傷つくと大変だから」と言った。「傷つけても大変だし」

彼女によると、左足の親指はほかの指よりも爪が硬いらしい。そのため靴下をつきやぶったり、人や物をひっかいてしまったりすると危ないので、カバーをかけているという。でも最初に言った傷つくとっていうのは、その爪が、ってことでしょう？　佐一が訊くと、彼女はそうだとうなずいた。

それきりその話は終わってしまった。彼女が親指を見せてくれることはなかった。そのうち自然と見る機会もあるだろうと思っていたが、けっきょくその機会がおとずれたのはそれから十年経ってからだった。海へ行ったときも、温泉に入るときも、セックスをするときも、彼女はぜったいにカバーを外そうとしなかった。

結婚して同じ家に暮らすようになってから知ったのだが、妻は足の爪をかならず十日おきに切った。それは毎回、一日のズレもなく、きっかり十日おきだった。

爪を切るとき、妻は言う。

「ちょっと爪切るから、見ないでね」

たいてい夜で、佐一はそのとき夕飯の洗い物をしたり、動画配信サービスで映画を見たりしている。うん、と佐一が返事をするや妻は洗面所へいき、戸を閉める。中からは、パチン、パチンと爪を切る音がする。見ないでと言われた佐一は、蛇口をすこしだけしめて水の勢いをよわくする。あるいは動画の音量をすこしだけちいさくして、その音に耳をすませる。その音から、わずかでも何かを知ろうとする。パチン、パチン。

だけどそんな音で何かがわかるはずもない。とはいえはっきり「見ないで」と言われてしまっている手前、覗き見るわけにもいかない。見せてくれと頼めばあるいは見せてもらえるのかも知れないけれど、足の爪を切るところを見せてくれと頼むのは、さすがに滑稽に思えて気がひけた。だからずっと、ただその音だけを聞いていた。

でも結婚二年目、思わぬところでチャンスがめぐってきた。

「お願いがあるんだけど」

リビングのソファに腰をおろし、沈痛な面持ちで妻は言った。膝のうえに置かれた右手には、親指にだけぐるぐると包帯が巻かれている。その日の昼間、階段から落ちた拍子に手をついて、あらぬ方向に曲げられてしまったかわいそうな親指。

包帯の厚みでふだんの三倍くらいのサイズになった痛々しいそれを見ながら、佐一は何でもどうぞ、と言った。

「足の爪をね、切ってほしいの」妻は言った。

ほんとにいいの？　と訊ねた佐一に、妻は「だって自分じゃできないから」と言った。やや不服そうな表情だった。それでも佐一はうれしかった。妻は洗面所の棚から紺色の巾着袋をとってきて、佐一にわたした。「これを使って、私の言うとおりに切ってね」そう言って、唇を小鳥のように尖らせた。佐一は、まかせてとうなずく。手先の器用さには自信があるほうだった。

ソファのうえで立膝をつき、人差し指と中指にひっかけるようにして、妻は左足の靴下を脱いだ。親指にだけ、今日もやっぱりカバーがかぶせられている。ふだん使いとしてよくつけている、あわい玉子色のカバーだ。靴下のときと同じ要領で、妻の指先がカバーにふれる。佐一の目の前で、妻の足の親指からはじめてカバーが外された。

カバーの下からは、呪言まみれでもドロドロでもない親指が出てきた。それはほかの指と同じようにはえていた。日頃カバーで保護されているせいか、ほかの指よりも肌が白くてやわらかそうに見えるくらいで、いたってふつうの親指だった。爪以外は。

妻の左足の親指の爪は、先端が不自然なほど円(まる)く整えられていた。そのうえ、黄色かった。黄ばんでいたわけではない。爪全体が、きれいな黄色をしていた。それはほとんど金色のようなまばゆさで、でも角度によっては檸檬色にも山吹色にも見えるような、ふしぎな黄色だった。

「ペディキュア？」

「ちがう」妻は言った。「私の左足の親指の爪は、二十七番目の月なの」

「にじゅう、なに？」

「二十七番目の月。エチオピアの」

妻の親指の爪は、二十七番目の月だった。二十七番目の月、つまり新月の日からかぞえて二十七日目に出る月のこと。彼女は親指の爪を十日おきに切り、切られた爪は送りだされて、二十七番目の月になるのだそうだ。エチオピアで。

「まってまって」佐一は言った。「ちょっと理解に時間がかかりそう」

「なんでよ」妻は笑った。「とりあえず、言ったとおりに切ってくれる？」

佐一は妻の足の親指の爪を切る。二十七番目の月にするために。

「丁寧にね」爪をのぞきこむ佐一にむけて、後頭部から指示が飛ぶ。「まずいちばん大きいやつで、ひといきに、でもゆっくり、思い切りよく、且つ慎重に」

巾着の中には大中小三本の爪切りが入っていた。ほかに、コンタクトケースのような容器と棒状のヤスリ、ひまし油の入った小瓶、上の部分が円くへこんだ定規もあった。容器の中にはすでに切られた爪が四枚入っていた。四枚の爪は容器の中でうっすらと発光していた。どれもきれいなアーチ状で、すべてが同じ厚みに揃えられている。妻はそれをお手本にして切れと佐一に言った。「大丈夫。そのいちばん大きい爪切りは、お手本とちょうど同じ厚さに切れるようになってるから」

大きい爪切りの刃の部分は、容器の中の爪と同じアーチ型になっていた。お手本の爪と、妻の足の指にはえた爪を交互に見る。爪切りの刃にちらちらと黄色い光が映る。刃を爪に噛ませてみると、たしかにある程度のところまでしか奥へいかないようになっていた。佐一は息を止め、妻の無茶苦茶な指示に可能なかぎりしたがった。ひといきに、ゆっくり、思い切りよく、慎重に。

パチン。

見せて、とすぐさま妻は言った。佐一は切ったばかりの爪をそっと手のひらにのせて、妻に見せる。吹けば飛びそうでこわかった。妻は爪をまじまじと見た。佐一の手のひらのうえ、皮膚の輪郭をにじませるみたいにして爪がよわく発光していた。妻はそれを中指でちょんちょんといじったり、佐一の手のひらの角度を動かして光にあててみたりした。

「オーケー」

妻は言い、佐一は胸を撫でおろす。

十日で伸びたぶんの爪からは、二枚の月ができるという。もう一枚も同じように切って、二枚の月を容器に収納した。それから二種類の爪切りを使い、はえている爪の形をきれいに整えヤスリをかける。こちらの作業のほうが面倒で、大変だった。ヤスリでならした部分が、大きい爪切りのアーチにぴたりとはまるようにしなくてはいけない。巾着の中にあった定規のへこんだ部分で何度も形を確認しながら、佐一はふたつの爪切りを駆使してパチン、パチンと爪を整え、ヤスリをかけた。なんとかそれを終えたら、仕上げにひまし油で保湿して完了だ。容器に入れた爪は、ある程度貯まったところでベランダから送りだしているそうだ。

「送りだす？　ベランダから？」

説明することのいちいちに佐一が引っかかるのが、妻はおかしくてたまらないようだった。「あたりまえでしょ」眉をハの字にして言った。「ねえ、まさか本当に知らないってわけじゃないでしょう？」

まさか本当に知らないってわけなのだった。切った爪はたしかにふつうの爪ではなさそうだったけれど、それが月だなんてどういうことなのか、佐一にはぜんたいわからない。「君の爪が二十七

番目ってことは、ほかに五番目とか、十番目とか、二十八番目がいるってこと?」

そりゃそうでしょう、とさも当然のように妻は言った。全員が爪でやっているのかは知らないけど、そりゃどこかにいるでしょう。だって、いないと困るじゃないの。

「エチオピアの夜に月がなくなるから?」

「そう」

エチオピアの夜に月がなくなるから、と妻は復唱した。

でもエチオピアの月と君の爪は関係ないだろ。佐一が言うと、妻は心底驚いた顔をした。

「本気で言ってる? 世界のどこかで誰かが泣いたり汗をかいたりするおかげで海には水があるし、誰かがくしゃみをするからどこかの草原で風が吹いてる。今ベランダに出たら見える今日の三日月は誰かの爪で、私の爪も同じ。私の場合は、左足の爪が二十七番目の月だった。そういうあなただって、何か持ってるんでしょう?」

楽々佐一は海になる汗も風になるくしゃみも月になる爪も、何も持っていなかった。そう言ったら、そんなわけないと妻は首をふった。「役所へ行って聞いてみれば? 自分で把握してないだけだよ。だってそんな人がいるなんて、聞いたことない」

こっちの台詞だった。そんな人がいるなんて聞いたことがない。妻は佐一のその態度がやはり愉快だったのか、ごめんごめんと言いながら、まだ半笑いの顔でこう言った。でもじゃあきっと、保有者(ポゼッサー)なんだろうね。

役所の入り口に設置された窓口案内図を見ると、たしかに妻の言っていたとおりの課があった。戸籍課のすぐとなりの窓口だった。

窓口にいた職員にすみません、と声をかける。

「なんでしょう」自分と同い年くらいに見える女性だった。背が高く、眼鏡の奥の目がするどい。佐一はすこし緊張しながら、事情を説明した。自分の妻の足の爪が二十七番目の月であること、妻によるとみんな何かしら、そういうものを持っているはずだということ。もし自分のそういうものについて、調べられるのであれば調べてほしいということ。

話している途中で、自分がおかしなことをしゃべっているのではないかと不安になった。けれど職員の女は、佐一の話をしっかり相槌を打ちながら聞いてくれた。感じのいい対応にほっとする。

「なるほど」佐一が最後まで話し終えると、職員の女は言った。「お調べいたしますので、こちらの用紙にご記入いただけますか。それと身分証明書になるものを何か、はい、免許証でかまいません。では少々お待ちください」

記入した用紙と免許証をわたすと、女はいったん窓口の奥へ消え、五分とたたずに戻ってきた。「お待たせいたしました」手には

タブレット端末と、先ほど記入したのとは別の用紙を持っている。
「ご担当は……あ、そうなんです。お問い合わせいただいた件については、役所のほうでは『ご担当』という呼称になっております。楽々様のご担当はですね、こちらになります」
女がわたしてくれた薄緑色の紙には、佐一の名前と生年月日、現住所が記載されていた。戸籍謄本に似ていたが、名前の下には見慣れない欄があった。

担当種別　：　保有者（ポゼッサー）
身体位置　：　胸椎T1〜T12
世界位置　：　Jaizkibel（ハイスキベル）（Gipuzkoa, Spain）

「ハイスキベル」はじめて口にするならびの片仮名だった。
女は「そうですね」とうなずいた。「スペインのバスク地方にある山です。身体位置は胸椎ですから、このへんですね」
言いながら、端末画面に人体の骨格図を出してくれる。グレーのマニキュアが塗られた指で示されたのはゆるやかに湾曲した脊椎の、真ん中よりすこし上あたりだった。それからすぐにべつのタブで世界地図をひらき、欧州の地域を拡大していく。「で、ハイスキベルが……ええっと、どこだ……ああ、これですね。もうすこしアップにしましょうか。これです。こちらがご担当いただいておりますハイスキベルです」
それはちいさな山だった。山頂部に白字で標高が書いてある。標高五四七メートル。「これがぼくの胸椎？」
「はい。ご担当いただいているのはこちらです。楽々様はハイスキベルの保有者となります。お話を伺った感じでは、配偶者様は提供者（ドナー）だったのでしょう。月は遠いですからね。太陽光の反射だけでは本来見えませんので、地域ごとにご担当の方がいるんです。
ご担当種別には二種類ございまして、それぞれ『保有者』と『提供者』と呼ばれています。
保有者の場合は何らかの世界位置がご自分の身体位置に属しており、提供者はご自分の身体位置から何らかを世界位置に提供していただきます。一般的に、ご担当は思春期から青年期のあいだに兆しがあらわれて気づくのですが、何しろ身体のことですから個人差がございます。ですので、保有者の方からのお問い合わせは、じつは結構あるんですよ。提供者とちがい、見た目にはあらわれていない場合が多いのが保有者の特徴ですから。
たとえばご本人は知らなかったのに、こちらで調べたらつむじがインドネシアのカルデラだった方や、上腕二頭筋がアマゾン川の三角州だった方もいらっしゃいました。ご高齢になるまで知らないという方もめずらしくありませんし、おそらく知らないまま亡くなられる方もいらっしゃるのではないかと思います。保有者のほうではとくに何もしなくていいわけですし、ご担当はひじょうに個人的なことなので、あまり誰かと話す機会もないでしょう

し。ですから兆しがなかった場合には、こうして調べないとわからないことも多いんです」

女は慣れた調子ですらすらと説明してくれた。

ハイスキベル。佐一はもう一度、その慣れない言葉を口のなかで転がした。困惑している様子の佐一に、女は励ますような笑みを向けた。「定期的な提供は面倒ですから、保有者の方がうらやましいですよ」

女の言葉に、佐一は「あなたは提供者なんですか?」と訊いた。

女はそれには答えず、「こちらの用紙はお持ち帰りになりますか」と言った。言いながら、すでに封筒に用紙を入れていた。うつむいた女の、とがった耳を見ながら佐一は「はい」と答えた。眼鏡のつるが掛かった耳には、何かの足跡みたいにピアス穴がたくさんあいていた。

封筒を受け取った楽々佐一が窓口から去った後、白仁美(つくもひとみ)は端末で、先ほど開いたページの画像をもう一度ながめる。ハイスキベルの詳細写真をいくつかスワイプする。教会のような建物、ハイキングをする人びと。ふと、ポニーが何頭か写りこんでいる画像で指をとめる。芝の上で、長い鬣(たてがみ)のポニーがぼんやりした顔で草を食んでいる。ふふ、と思わず白仁美は笑みをこぼす。素敵な山だ。

白仁美の担当は、アルジェリア中部のワルグラにある砂丘だった。身体位置は右耳で、定期的に耳垢を提供している。週に一度の耳掃除でとれる耳垢は、保管用の小瓶に入れるとさらさらと崩れて砂になる。恋人は、その砂をきれいだと言う。仁美はとくにきれいだとは思わなかった。耳垢は耳の中にあるときはかたまっているけれど、どういう理屈か小瓶に落として空気にふれるとこまかい砂状になった。

「いいじゃん、私も提供者がよかったなあ」恋人は言った

彼女は右下顎に生えている第二大臼歯が、グリーンランドの氷床の一部だった。でもとくべつ、青かったり冷たかったりすることはない。保有者の場合、その部位の見た目や機能は一見してほかの人のそれとは変わらないことが多い。恋人の第二大臼歯も例外ではなく、あくびをしたときにちらと見える色形も、仁美の舌先がふれたときに感じる温度も、まるきり普通の歯のそれだった。

「保有者なんかつまんないよ。提供者のほうが、自分の一部が世界の一部になってるんだって実感できそうじゃん」

そうなのかな、と言いかけて仁美は口をつぐんだ。かわりに「まあね、そうだよね」と言った。

小瓶に入った砂状の耳垢を見るとき、仁美はそれをとくにきれいだとは思わなかった。ただ、これが還っていくのだ、と思った。

役所や人びとが言うように、自分の身体の一部を世界に提供しているのだというふうには、仁美はどうしても思えなかった。だから『担当』『保有者』『提供者』、それらの呼称の使い方にも違和感があった。逆だと思っていたからだ。

白仁美がワルグラの砂丘を担当しているのではなくて、ワルグ

ラの砂丘がたまたま今、白仁美を担当している。保有しているのも、提供しているのも、こちら側ではなくて世界の側だ。そんな気がずっとしていた。

ごく親しい間柄の人間であっても、自分の担当を明かさない人はすくなくない。みんな目をそむけているだけで、本当は仁美と同じことを思っているんじゃないだろうか。最近ではそんなふうに思うようになった。だから自分の担当を人に言わないのではないか。担当を明かすことはつまり、目の前にいる自分がかりそめの姿であることを相手に告げるようなものだから。

でも恋人はちがった。だから互いに担当を明かしたけれど、それがよかったのかどうか、今でも仁美は判断できずにいる。

恋人の鈴が鳴るような笑い声を聞きながら、うすい唇にふれながら、おわん型の乳房に顔をうずめながら、今自分が抱いているのは、あたたかくてやわらかな身体を担当しているグリーンランドの氷なのだという思いがいつもあった。それもふくめて愛しいと思った。幸運だと思った。ワルグラの砂が、グリーンランドの氷に出会うことができるだなんて。同時にひどくさびしかった。そうだとしたら、私たちは本当の姿で愛しあうことはぜったいにできないから。

あの男性は、と仁美は端末画面のポニーをなでながら思う。自分の担当を知って、どんな気持ちだったんだろう。「妻はエチオピアの月」だと彼は言っていた。ワルグラの砂がグリーンランドの氷にふれられないように、エチオピアの月はバスクの山からは見えない。それについて、どんなふうに思うんだろう。

仁美はこれまでに二人、月の担当者に会ったことがある。月は世界位置が多く、見えている形状も複数あるため、担当者も多い。浮かんだ月は夜明けとともに光に溶けていくと聞いた。粒子になったそれは遠くの月へ還っていくのだ。月はグリーンランドより、エチオピアより、もっとずっと遠い。

すみません、と窓口の方から声がして、はい、と仁美は立ちあがる。ポニーの画像をとじる。暗くなった画面に、感じのいい笑顔を浮かべた白仁美という女が映っている。耳の奥で、がさっという音がする。そろそろ耳の掃除をしなくてはいけない。

家に帰ると、妻が玄関まできて「どうだった」と訊いた。「あった」と靴を脱ぎながら佐一は言った。「胸椎がスペインの山だった」

ほら、と妻は得意げに腕を組んだ。包帯を巻いた親指が、指人形のようにぴょこんと飛びだす。やっぱりあったでしょ。山かー。「ハイスキベルっていう山だって」

佐一の言葉を聞いているのかいないのか、妻はもう一度、不自然なほどあかるい調子で「山かー」と言った。「いいなぁ。いちいち何かを切ったり取ったりして送らなくていいんだもんね、うらやましい」

ついさっき窓口で職員が言ったことと同じようなことを妻が言

うので、佐一はなんだかおかしくて、思わずすこし笑ってしまう。
「え？　なに？」妻が言い、佐一は「なんでもない」と言う。
洗面所でシャツを脱ぎ、背中を鏡に映してみる。でもそこには山はない。ぽつぽつと日焼けによるシミができている。背中をかるく丸めてみると、背骨がとっとっ浮き上がる。自分の背中をきちんと見るのは、これがはじめてのような気がした。首をめいっぱい回した無理な姿勢になるため結構つらい。それだけやっても満足に背中全体をながめるのはむずかしかった。
「ところでさ、なんでずっと爪を見せてくれなかったの」
シャツを着直してから佐一は訊いた。
「だってあなたも胸椎の山を教えてくれなかったじゃない」妻は言った。「まさか知らないとは思ってなかったけど、だから私も教えなかったの。教えてくれないってことは、知りたくないんだろうなって」
サーモンピンクのカバーをつけた親指をお辞儀させるみたいに器用に動かしながら、それに、と妻は言った。「こういうのって一度見せたら、見せる前にはもう戻れないじゃない」
夕食のあと、佐一は妻といっしょに爪を送りだすことになった。上着を羽織ってベランダに出ると、東の空には月が出ていた。今日の月は四番目、容器の中にある爪よりもすこしだけ分厚い。佐一はそれをちょっと見て、それから妻のかわりに容器の蓋を開けた。
容器からとりだした六枚の爪をそっと妻の左手のひらにのせる。妻が目で合図をして、「いくよ」と小声で言う。佐一が黙ってうなずくと、妻はバースデーケーキの蝋燭を吹き消すように、ふうっ、と手のひらに息を吹いた。
六枚の爪がハラハラとこぼれ落ち、佐一はおもわず「あっ」と声をあげる。途端、こぼれ落ちた爪は、空中でゆったりと跳ねるようにして浮かびあがった。
宙に浮かんだ爪たちは、ふらつきながら一列に整列した。群青の闇にやわらかな黄金の光がにじむ。空に向かってのびるみじかい階段のようにならんだ爪は、やがて両端の鋭い部分をよちよち前後に動かしながら、西の方向へむかってのぼりはじめた。ときおりフワッと風にあおられると、波打つようにその風に乗り、そのぶんだけ大きく前へ進んだ。
「かわいいでしょう」妻は言った。かわいい、と佐一はこたえた。「ああやって、ときどき風に乗りながらエチオピアまでいくみたい」
エチオピアについた六枚の爪は、すでに着いている爪の後ろにならぶのだろうか。佐一は、口には出さずに考える。そこにはきっと五番目とか、十番目とか、二十八番目の月がすでにいて、爪たちはその間に順番に入りこむ。そうやって、自分たちの出番をエチオピアのどこかでひっそり待っているのだ。そうしてようやく自分の番がまわってきたら、東から夜空をのぼり、くだり、沈んでいく。エチオピアの二十七番目の月として。

爪たちは、佐一たちのほうをふりむくそぶりもなく、よちよちふわふわ空をいく。佐一はなんだか急に不安になって、ふと隣の妻を見た。妻はベランダの柵に顎をのせ、爪たちの行く末を見つめていた。見慣れたはずのその横顔が、なぜかその瞬間、まったく知らない人間に見えた。目をこすり、まばたきをした。背骨がきしむ。風が冷たい。今自分の隣にいる、この女はいったい誰だ？

女は、ゆっくりこちらをむいた。

「寒いね、そろそろ入ろう」そう言った妻は、もういつもの妻の顔だった。西の空を見ると、爪たちはいつのまにか見えなくなっていた。

ひと月が経ち、利き手のけががすっかり治ると、妻はまた爪を切っているところを見せてくれなくなった。

ちょっと爪切るから。そう言って、妻は洗面所の戸を閉める。しばらくすると、中からパチン、パチンと爪を切る音が聞こえてくる。夕食の洗い物を終えた佐一は、濡れた手をしっかり拭いてソファに座る。シャツの下に手を入れて、背中をなでる。かるく背を丸め、骨の凹凸をゆっくりなぞる。目をとじて、バスクにそびえるちいさな山と、エチオピアにのぼる二十七番目の月のことを考える。

大木芙沙子

二〇一九年からオンライン文芸誌「破滅派」にて活動。トウキョウ下町SF作家の会所属。二〇二一年に"Neighs and Cries"（原題：馬娘婚姻譚）が *New Word Writing* に掲載されたのを皮切りに *Mythical Creatures of Asia*（Insignia Stories）等に英訳が掲載される。（翻訳はいずれもToshiya Kamei）。思わず人に勧めたくなったり、感想を共有したくなる「余韻」が残る小説が魅力の書き手で、短編集『花を刺す』（惑星と口笛ブックス）を刊行している。二〇二二年には文芸同人誌『閑窓 vol.5 道辻を灯す』に寄稿した「ふくらはぎ」が同人雑誌優秀作に選出され、『文學界 二〇二二年一二月号』（文藝春秋）に再録された。『文學界 二〇二三年五月号』にへそからうなぎが出てくる奇想小説「うなぎ」を寄稿。同作は『水都眩光 幻想短篇アンソロジー』（文藝春秋）に収録。

# Linguicide,[n.] 言語消滅

赤坂パトリシア

カバーデザイン　浅野春美

ぽっかりと朝の空にひっかかった白い月を見ながら人気のない日曜の街を歩く。学生のころ授業で触れた月の姫の話がふわりと記憶の底から浮かび上がってくる。手に入れることなどできるはずのない宝物を要求した光り輝く姫の話。これが日本最古の物語です、と手渡されたその物語に私はその時、とてつもなく惹かれた。もしも彼女を目にしたら私もまた、彼女に求婚した人々のように、心を奪われたに違いない。選ばれる可能性など全くないとわかっていても魅了されることはある。

ユーストン駅近の寂れた食堂（グリーンスプーン）に足を踏み入れると、ジョーはすでに座って薄いコーヒーを口にしていた。

「よ」

低く声をかけると、唇の片方だけをぎゅっと上げて歪めて「よお」と答えが返ってきた。言葉にもならないような音だったが、それは明らかに英語ではなく、日本に住んでいた人間のもので、私の頬にひきつった笑顔が浮かぶ。

「生きてるか」

「なんとか」

「こっちはひどいもんだよ」

「どこもひどいもんでしょ」

「原因はまだわからないんだろ」

「わからないみたいだね」

ジョーは頭を抱えた。
「かんべんしてくれ」
「そっちも仕事は消えた?」
答えはなかったが、わずかに下げられた頭が何よりも雄弁に是を示していた。私は肩をすくめる。私の仕事もすっからかんだ。まるで大きな車がきしむブレーキ音を立てて止まるように、半年前、私を取り巻く世界の一部が停止した。ほどなくして全ての仕事が――隙間時間にやっていた日本語家庭教師の仕事に至るまで――干上がった。一番の稼ぎをたたき出していた企業向けの翻訳が、まず消えた。それから日本事情を簡単にまとめるウェブ記事の連載。次から次へとドミノを倒すように、仕事が目前で減っていくのはいっそ爽快ですらあった。
「落ち着いてんな」
「いや、もう焦るのを通り越したというかね」
私は苦笑する。あまりにも酷いことが起きると、時々人間は笑うしかなくなるものだ。
「クロエ、大変だったみたいだね」
「パートナーと子供が同時にだってさ」
「子供の日本語教育、頑張ってたもんね」
「報われないよなあ」
ジョーは溜息をついた。
「継承語話者では逃げ切った奴もいたのにさ、なまじ頑張ったせいで……」
「そうだね」
私は首をコキコキと鳴らした。

異変の兆候は、まず、日本国内ではなく、海外大都市で発見された。日本は本格的な暑さを迎えようとしている梅雨明けの火曜日、日本時間一九時四六分。北京で、ロンドンで、ニューヨークで。日本人の配偶者、友人、同僚が忽然と消えた、という報告が相次いで上がったのだ。まるで魔法のように目前でかき消えた、という訴えは最初失笑をもって、後には困惑をもって受け入れられた。
日本との時差十三時間。ようやく目覚め始めたワシントンDCに、日本に何か大変なことが起きているらしい、という話が入ってきたのは日本時間で二〇時、現地時間では午前七時のことだった。まず伝えられたのは飛行機の事故だった。成田を含む空港の管制塔が一切の指示を出さず、何機かの飛行機が大きな事故を起こした。次々と失速する飛行機や、ゆっくりと正面から衝突する飛行機の動画は今にいたるまで悪夢のように私達の記憶に鮮明だ。
事故が起きたにもかかわらず、救急車や消防車その他が出動した形跡さえなく、結果として助かるはずだった人命も失われている。多大な人的被害を出したはずのそれらの事故の詳細は半年たった現在でもまったく不明だ。「はずの」と言うのは、満員だったはずのそれらの飛行機から見つかった遺体の数が極めて少なかった

からだ。それらの飛行機のうち何機かのブラックボックスからは機長、および乗務員の声が現在でも一切検出されていない。

何かが起きていることに気づいた各国政府は日本政府にコンタクトをとろうと試みたが、日本政府からの応答はなかった。在日米軍基地からはかなり初期時点で米政府に緊迫した報告があがったという。さほど遅れることもなくＡＰやロイターをはじめとする通信社の特派員から半狂乱の速報が全世界に届き始めていた。

いわく。

日本人が、消えた。

忽然と、ほぼ全ての、日本人が消えている。

正確に言うと、日本国籍保有者の大半が杳として姿をくらませたのだった。赤ん坊から老人にいたるまで。しかし、ごく稀に奇妙な形で「残される」日本人もいた。その多くは幼少期に海外滞在経験を持っていたり、複雑な文化的背景を持っていたが、年齢や職業、現在の健康状態などはまったくまちまちで、一見してすぐにわかる共通項はそれ以外になかった。

海外でのもっぱら困惑を基調とした初期の反応とは対照的に、日本国内の混乱は最初から切実だった。外国人人口が十五％を超える新宿区からは、悲痛な叫びがＳＮＳを通じて全世界に発信された。「隣のアパートから赤ん坊の泣き声が聞こえる。助けたいが、ドアを開けようがない。声はどんどん小さくなっていく。どうすれば良いのかわからない」「隣家で泣いていた三歳ぐらいの子供を保護した。真夏の都内でクーラーもなかったらしく、脱水症状を起こしかけており酷い有様だが病院が機能していない」「火災が起きているのに一一九番に返答がない」「運転者のいなくなったトラックが建物に突っ込んできた」

そしてごく稀に「うちの子供が消えた。私達は日本人ではないのになぜ」――。

東京株式市場は閉鎖され世界経済は混乱の極みにたたき落とされた。物流がストップしインフラが止まり、やがて在日外国人たちの声もなかなか届かなくなった。

事件発生から二日後、国連は健康な民主主義が保たれていると目される独立国に対しては異例の介入を決定し、日本に軍を派遣した。それは賢明な判断だった。管理する人間のほとんどいなくなった原子力発電所に直ちに技師を派遣する必要があることがわかったからだ。第二第三の Fukushima が起きなかったことは僥倖というしかなかった。

在日外国人たちが訴えたように、日本からは九〇％に近い人間が消えていた。原因は一切不明である。

ほどなくして一つの仮説が提示された。

――消えたのは「日本人」ではなく「日本語母語話者」であり、そこに国籍、性別、年齢の区別はほぼなかったのではないか。

ただし、この仮説は説明よりも多くの疑問を引き起こした。

一体どこから人は「母語話者」になるのか。母語話者として認

定されるための線引きとは何か。もしも線引きがなされているのだとすれば、日本語を構成する各種要素のどれが一体その基準となっているのか。

手がかりとなりそうな研究はもちろん数多く行われていた。しかし、日本語を対象とした母語獲得の研究にせよ、文法や音韻の研究にせよ、その多くを第一線で担っていたのは、言うまでもなく日本語母語話者たちであり、彼らはことごとく消滅していた。彼らの残した大量の研究成果こそ消滅せずにあったものの、第二言語話者である残された研究者たちにとって、膨大な資料の海を把握する作業が一朝一夕に終わるようなものではないことは明らかだった。

さらに、そこには、もう一つ大きな問題があった。そもそも「日本語」の範囲とは何であるのか。ユネスコによって絶滅危惧言語に指定されていた八重山方言を母語とする年配の話者が数人残ったこともあり、「日本語」の範囲が必ずしも国によって規定されるものでないことは明らかだった。現に日本手話母語話者は——約六万人弱いたが——厳然として残っており、混乱した状況下でも固有の領土である日本の自治とそれを可能にする各国の援助を強く求めていた。対照的に絶滅危惧言語（レッドリスト）に指定された他の国内少数言語話者は消失しており、六ヶ月たった現在でも言語の区分は依然不明である。

一体何が言語による人間の抹消を引き起こしたのか、その機序は。また—全く考えたくないことではあったが——こういった言語による抹消が他の言語話者に起こる可能性はあるのか。先進諸国では研究機関がこぞって自国の母語話者が消失した場合の被害をシミュレートした。東京は人口の均質性が高いという意味で明らかに被害が大きかった。とはいえ、その他の国も決して安全とは言い切れず、少なくとも基幹産業には様々な言語を母語とする労働者を採用するべきではないか、という議論も高まりを見せた。

運転者を失い止まることのなかった観覧車から二日ぶりに救出された観光客の衰弱しきった映像は、こうした議論をヒステリックなものにした。

全世界が緊張する中、私は突然自分が「世界第三位の経済規模を誇る国の言語を解する人間」から「死語話者」へと転落したことに気づいた。それはそれで別種の頭痛を私個人に引き起こした。仕事が激減したのだ。全世界的な大災害が起きていても来月の家賃は払わなくてはならない。さらに言うならば学費ローンも残っている。日本語を習得するためにこしらえた借金だ。私は後期資本主義社会の現実を生きていた。

「SOASが日本語保全プロジェクトを始めるって……」

ジョーがぼそっと言った。無精ひげが生えている。昔からあまり見た目を気にしない男だった。

「ああ、聞いた。イザベルが一枚かんでるんだって」

話題は大学時代の知人に飛ぶ。日本語科を卒業した後大学院に進み言語学を専攻したはずだ。確か日本語文法が主分野だった。
「イザベルが残ったのって意外だったよな……」
ジョーは言う。日本人の母親を持つ継承語話者の彼女の日本語はクラスの他の人たちから頭一つん抜きん出ていて、私は常に彼女を母語話者のようなものだと思っていた。その彼女が残ったのだと聞いて、どこかで頷いている自分がいた。
そうか。彼女が選ばれなかったのであれば、しかたない。私が選ばれて、日本語とともに消える可能性など万に一つもなかったのだ。——いや、消えたかったわけでは、まったく、ないのだが。
「もうこれからはそっちの方にしか、仕事はこないかもしれないな」
友人の声は重い。
「そっちの方って?」
「研究関連。日本語保全とか、母語話者のラインはどこにあるのかとか、人間消失の機序とか」
私は頷いた。特に最後の二つはすでに現在あちらこちらで研究が進められている。各国政府から多大な研究費用が注ぎ込まれているはずだ。一気に干上がった日本語周辺の産業において、そこだけが今も金回りがよかった。
「被害者のライン確定の判断が難しいみたいだね」
「母語話者がそもそもいなくなっちゃったからなあ。どうやって規範確認してるんだろう」
「コーパスだとか、録画や録音使ってるんだろうけど」
「オックスフォードだったっけ、AIだとかディープラーニングだとかあのあたりと組み合わせてるって言ってなかったっけ」
「まあ、今となっては別に目新しい技術ってわけでもないしね」
言語の習得が未だに生きた人と紙とペン、それに録音された音源に多くを頼っているのに対し、言語の研究自体はすでにコンピュータと最新技術を駆使しており、私達の知識を遙かに超えたものだ。それはすでに学生の時に感じていた。私達はデジタルインクジェットプリントが席巻する社会の中で古典的な漆塗りを学ぶ職人のようなものだった。
「——北京も相当力入れてるって聞いた」
「やるだろうな。地理的にも近いしね。普通話で同じことが起きたらすごく混乱しそうじゃないか」
「ただ、あれだね、キャリアとしては先がなさそうな感じが」
「使い捨てられそうだよね。まあ、そもそも学部までしか出ていない人間にはね」
たまたまその言語に魅せられただけの人間にできることは驚くほど少なかった。軽く溜息をつくと、友人は唇を歪めたまま言葉を続けた。災害っていうのは、こういうもんだよな。本当、お手上げだ。
「研究の意義とか、わかるっちゃあわかるんだけどさ……俺さあ、

そういうのやりたくて日本語を勉強したんじゃないんだよね、やっぱり」

ゲームだとか、ラノベだとかさ、たいして金になるわけじゃないんだけど、今生きて動いているものを同時に翻訳していくのがさ、楽しかったんだよ。誰より先に面白いモノを見つけてさ。二つの世界をつなげて行くみたいな——わかるかな。このリアリティとあのリアリティをつなぐのが自分だ、みたいな感じ。

一億二千万人が消えたときにこういうの、どうかと思うんだけどさ。知り合いも一杯消えているし、そういうのもあるんだけどさ。でも、それでも、こう、日本がどうのだとか、外の世界がどうっていう以前に自分の世界が半分消えたみたいな喪失感っていうか。他人にはとても言えないんだけどさ。

「わかる」私は頷く。「そういうのとは全然別の場所で自分が半分消えたみたいな気分だよね」

「わかる?」

「まあねえ。あんたが『おいしいから』って言えずに『おいしいだから』って言ってたころからのつきあいだし」

「やめて」

初めて苦笑らしきものが浮かんだ。津波のように記憶が押し寄せ、私達を海底に沈める。大学の教室の眠たげな空気。フラッシュカード。リスニングテスト。長母音と短母音の違いについて。複合語になると変化する高低アクセント。なぜか日本語話者には直感的に意味がわかるらしいのに私達にはよそよそしい表情しか見せないオノマトペ。少しずつ、少しずつ、重い綱をたぐるように、私達はその言語を習得した。それは長く重い道のりで、どこまで行っても終わりが見えないのに、確かに私達を魅了していた。

「酷い言語だったな」

「書記システムがめちゃくちゃでね」

「そのうえカタカナ言葉の発音のランダムだったこと……!」

「こっちが全然しゃべれなくて打ちのめされてるときに、情け容赦なく『日本語上手ですね——』って褒めてくる母語話者とかね」

「それ言ったら箸だよ、箸。何年使っててもかなりの頻度で褒められる」

くつくつと笑いながら私達は運ばれてきた脂っこい朝食を口に運んだ。褒められることで傷つくということも世の中にはあるのだ。繰り返し、繰り返し、お前は異物だ、と言われているような。

「……なくなったんだな」

「なくなったんだね」

私が二十代を注ぎ込んだ言語と社会は全く予想もできないような形で消えた。母語ではないのに私の中では母語に近い存在感を放つ——言うなれば私の継母語。私は母語以上に彼女を愛していた。世界のどこにも居場所がないような気持ちでいたころに、私に居場所をくれた言語。今でも母語での思考につまると私は彼女のもとに走る。

「イザベルさ、落ち込んでた」
「イザベルが？　保全プログラムに夢中なのかと」
「復元に成功したとしてさ――もしも再び母語話者を育成できるようになったとして、その子供が消えない保証はないじゃないか」
「ああ――」
「――まあ、倫理的に無理だろ。日本語母語話者の再生なんて。学習者数だって激減したんだ」
　ベイクトビーンズの味付けが甘すぎる。ベーコンはペラペラのプラスチックのようだ。私はその時初めて継母語の死を実感した。本当にこの言語は死んでしまうのか。私の中に決して完全なものになることのない大きな痕跡だけを残して。
「まあ、言語っていうのはわりとすぐに死ぬものだけどね」
　同窓生の抑揚のない言葉に私は頷く。どこかで帝国が拡大するたびに、どこかで少数言語コミュニティが政治的、経済的な圧力にさらされるたびに地球上の言語は減っていく。「自然に」消えることもあれば、殺されることもある。珍しい話ではない。二十一世紀初頭に地球上に存在していた言語の九〇％は二〇五〇年までに消失するのではないかと言われている。かつて現代日本共通語が誕生するときに数多くの日本語「方言」が駆逐されたように――強い言語は弱い言語を喰らう。弱小言語は弔われることなく消滅するのだ。私達は狭い教室で確かにそんな講義を一緒に聴いた。まだ日本に足を踏み入れたことさえなかったころのこと。
　決して悼まれることなく消えていった様々な人々の「世界」のかけら。今私達が吐き気とめまいをもって日本語の消失と向き合っているように、多くの人がおそらく過去に「母語ですらない」言語で誰にも届かない悲痛な叫び声を上げたに違いないし、なんなら、きっと今この瞬間も地球上にはそんな叫びが――誰にも届かないまま――虚空へ投げられているに違いなかった。一緒に向き合って弔いのベーコンを食べることができる相手がいるだけ私の立場はまし、ではあるのかもしれない。
「イザベルがさ――光につつまれたんだって」
　昔、ジョーは彼女と寝ていた。それ以上の何かがあったのかは知らない。お互いをボーイフレンド、ガールフレンドと呼ぶような仲でなかったのは確かだ。ふと私は彼らがこの未曾有の大災害の中で再び抱き合っているということに気づき、心からうらやましく思った。こういう時に抱き合える相手がいるのはいい。
「――光」
「そ。それでとても幸福になって――それでそのままどうなっても良いと思ったのに光は消えたって」
「――母語話者じゃないとされたわけだ」
「だろうね」
　継承語話者の中には何人か、そんな経験をした奴がいるみたいだよ、とジョーは呟く。まあ俺はそんな経験はしなかったわけだ

けど。当然。彼の笑顔は歪んでおり、私も唇を歪めてそれに応える。まあ――ね。わかってはいたけど。

まるで天の羽衣のようにイザベルの体をうち包んだであろう光。

――ふと天の羽衣うち奉りつれば、「いとほし、愛し」と思しつることも失せぬ。この衣着つる人は物思ひなくなりにければ。

蓬莱の玉の枝、火鼠の皮衣、仏の御石の鉢、龍の首の珠、燕の子安貝。

助詞の正しい選択、高低アクセントの完全なる習得、漢字の正しい書き方と読み方、無数にあるオノマトペの記憶、言葉を超えてなおかつ理解を阻む文化的差異の克服。

胸焼けがしそうなほど脂っこい朝食を終えて、私と男は食堂を出る。薄っぺらい紙のような昼の月は跡形もなく消えていた。それから私達は軽い抱擁を交わし――日本語の消えた世界を反対方向に歩き始めた。

それでも見えない月は空のどこかにひっかかっているはずなのだ。

私と彼と彼女に見えないだけで。

※作中の言語獲得描写に関して池田友美氏の助言をいただいた。ただし全ての誤謬は赤坂に帰する。

赤坂パトリシア

イングランド在住。仕事と子育てをしながら、小説投稿サイト「カクヨム」にて執筆活動をしている。二〇一九年には、カクヨムで連載していた『ネコばあさんの家に魔女が来た』が第四回カクヨムWeb小説コンテストでキャラクター文芸部門・特別賞を受賞、二〇二〇年にKADOKAWAから単行本として出版された。イギリスの文化や歴史に関わる分野の博士号を取得している。バイリンガルの子どもを育てていることもあり、本作のテーマである言語、特に継承語については日頃から考えている。二〇二二年に*Strange Horizons*に掲載された"*Annunciation*"も言語SFで、「言語」を妊娠した日本人女性チトセの物語。物語の背後にある社会問題を射程に入れた細やかな人物描写が魅力の作家だ。

# 種の船は遅れてたどり着く

高山 羽根子

カバーデザイン　浅野春美

かつて男性と女性の役割が明確に区切られるようになった、そういうふうに時代が移行した転換点というものが『狩猟と採集』から『栽培』の文化に変化したあたりだということは、今ではとても一般的な説のひとつだった。

安定した栄養源となる作物を栽培して、その周囲に定住しながら生活の期間を一定に循環させることによって、人の社会的なあらゆる役割は固定された。それまで人類は性別に関係なく積極的に狩りに参加していたことはまちがいなく、考古学資料でも大型動物を狩る際にけがをしたらしき女性の骨が、男性と同じように確認されている。木の実や貝類の採集や調理も、その後に生まれる男女の役割の区別を意識することなく行っていた痕跡が多く残っている。住居内に居た時間の長さは性別によるちがいは大きくなく、狩りや漁、料理や家での働きもすべて同じように行われていたというのが、現在の最新調査から結果が導かれている。

かつて――というかきっと今でもなお――世界のあちこちに点在する博物館の中、埃っぽいにおいのするひんやりとした展示室の隅に在る、再現画やジオラマなんかでよく見られる『男が狩りに出て、女が洞穴で子育てをしながら住居にいる』という日常生活のシーンは、最新の見解によれば近現代ヨーロッパをはじめとする比較的新しい価値観に基づいたものだろうとされている。

彼女らが『船』に乗って遠くに移動していたのは、おそらくそ

の時期までだったのだろう、と私は考えている。それは、開拓、移民をするにあたって、その時期以降はほとんど男性のみを主体として想定されたものになっているためだった。記録に残されている以降の時代、移民はまず充分に武装した男性だけが向かい、現地の女性と（契約の有無を問わず）家庭を築くという――今の価値観でいうと間違いなく侵略と略奪と呼ばれる――行為が行われていた。

穀物等の栽培による定住は、領土という概念を生み、開拓という考えかたを、そうしてさらに侵略だとかいう価値観をすっかり定着させてしまった。その価値観より以前に、知らぬ土地に向かったのが女性であることは自然だったのかもしれない。

彼女らが移住のために乗っていたのは『種の船』と、今、私たちはそのように呼称している。

移住の際にあらゆる『種』を積んで移動していた当時の理由が、出発地のデータアーカイブのためなのか、単にそれらを移動時の食料にしていたからなのか、現在のところ未だ詳細には解明されていない。おそらく狩猟採集と栽培の過渡期であったため、開拓地にうまく定植した場合、その植物の採集ができる、という程度のごく原始的な栽培を計画していたのだという説が一般的だ。

この時期の文化は、その高度さに反してテキストや記号の類がまったく残っていなかった。そのため詳しい情報については残された遺構からわずかな物質を採取し、あらゆる種類の分析を繰り返しながら推測するしかなかった。

当時、船に載せられていた種は大量で、またとても多岐にわたる種類のものだった。移住のために積み込まれた多様な種は、船倉の内壁にいくつも並んだ小さな引き出しに分類されて納められた。そのため、ここに入れば出発した土地の植生がほぼ理解できるという、図鑑の役割を持っている。言葉による伝達がないごく初期の彼女たちの世界では、知識の蓄積や後代への伝達について、こういった実物標本のアーカイブが重要になっていたとも考えられる。

すべての種は行路上のどこかで定着できるよう、多様な環境に耐えうるための工夫をこらし保存がされていた。たとえば、この船がどこか思わぬところで座礁や転覆などしたら、流れついたその岸に森ができるかもしれないと思えるほど、それらはとても膨大で、慎重に加工、保管、管理がされていたと考えられる。

積みこまれた種の中にはまず、裸子植物である針葉樹、マツ類があった。低温によく耐え、世界中の寒い場所に育ち、生きものの繭じみた形状の鱗を持つ実に、油分の高い種子を蓄える。寒い時期にも常緑の葉を保つこれらの植物は、ユーラシアの多くのエリアで長く神聖視されていた。そのため彼女たちの船に保存されていたこの種子の痕跡が、彼女たちの移動して行く先々、航行ルートを辿った順に見つかっていったのは、ごく自然なことだと思わ

れた。

鬼胡桃は堅い殻を持つことで長期保存性に優れる。殻の中に在る仁は油分が強く、ビタミン等の各種栄養価も高いため、現在まで長く食用とされている。遺跡も残らない文明以前の人類によって食されていた跡が多く見つかっているうえ、種の中身が人の頭の中に詰まった脳と同じ形をして見えるということから、文明世界の広範囲では知恵の象徴とも考えられてきた。

胡麻は、アフリカからインドで栽培の記録がある古代から現在まで、ほとんど変化のない、おおむね原種に近いものが流通している。古くから、薬用から搾油まで広く用いられた重要な植物であったとされる。油は動力燃料ともなった。

小麦、大麦をはじめ、ライ麦、燕麦といった麦類は、世界各地で栽培を開始されるや、たちまち文明が起こり、また支配、被支配や権力構造を人の中に芽生えさせるまでの力を持つ作物だった。現在ではこれらの作物が人間に憑りつき支配したのだ、とさえ語られるほどだ。旧石器時代の中近東には、すでに栽培をしていた痕跡が残っている。栽培の長い歴史で種として洗練されていったけれど、もちろん、原種はほかの多くの雑草とかわらない野生の単子葉植物だった。

落花生は名前の通り、花が落ちた後、地面の下で結実する。油脂分を多く含み、栄養価が高い。古代ペルーの遺構から殻が大量に出土しており、残っている資料によると食品としてよりむしろ薬品として用いられていたことが知られている。開拓時代以降のアメリカ大陸では長く家畜や奴隷の食料として利用され、南北戦争の食糧難によって白人にも食用が推奨され、『ピーナッツ』の愛称が与えられた紳士姿のキャラクターも生まれ、広くキャンペーンが行われた。以降、ピーナッツバターやクッキーのトッピングとして愛されるようになる。

船に乗った当時の女性たちはその船の特性から、現在の私たちによって『種を運ぶもの』と呼ばれている。彼女たちは、選ばれるために多くの審査を経たのち長じて種を運ぶものになった。それは巫女的な信託を基に決定されていただろうという、かつてまでの印象とはちがうものだった。より新しい研究でその審査は、弓の腕、泳ぎの能力といった運動能力の試験や、人体、植物や動物、天体、海洋、工学、力学あらゆる知識の試験によって決められたものだと考えられている。

彼女たちは自由な研鑽を許された場所で安全が守られ、何を学ぶことにも制限を設けられることがなかった。当時周囲の人々に説明をすることが困難なほど高度で複雑な技術を持つ彼女たちの秘密は、そのエリア内で守られていた。そのため、周囲の人々が魔法や占いの訓練を繰り返していたという理屈で、不穏を感じながらもなんとなく納得していたというのも無理はないように思えた。

彼女たちの船の中での業務や、行く先々の流浪する先でどう生き抜いていたのか、どこを経由し、どこでどれくらいの時を過ごし、最終的に到着した先でどのように暮らしていたのかを知ることは、私たちが彼女たちの到着地にたどり着き、調査を繰り返すことでしか可能にならない。

彼女たちはあらゆる種子を注意ぶかく配合することによって、栄養学にかなった食料を作る知識を持っていたようだ。

小麦と落花生の粉末に、麦芽の糖を合わせて練ったものを生地とする。炊いた小豆、胡桃、練り胡麻、マツの実などを練り合わせたものを餡として、生地の中に包みこむ。包んだものを一旦『型』に押し付け、取り出したものを焼き上げると、長く日持ちのする航行食になった。

あらゆる植物の種を集めて焼き上げたそれは、月の餅と呼ばれる。栄養価の非常に高いそれは、ひと切れあれば彼女たちなら一週間は飢えることがなかった。原材料の種はあらゆるところで育てることが可能で、増やすことさえできるなら同じものが量産できる。

『型』は、人間の用いる道具の中でもかなり古く、ただ現代でもほぼ同様の使い方で用いられている、とても特殊な種類のものだった。型を用いることによって同じ大きさ、形のものを大量に作り、型の凹凸によって文様を刻むことができる。型の文様は、公式な文字をほとんど持っていない彼女たちの当時を推測する大きな手掛かりになった。今では調査が進み、それぞれは細かな意味を持ち、科学的な暗号でもあったと考えられている。

彼女たちが最終的に行き着いた、そのはるか遠くの場所に、私たちがずっと遅れてたどり着いたのは、彼女たちの到着から何万年も経った後のことだった。

いま私たちが乗っている船の名は、はるか昔から続く国のプロジェクトのひとつから与えられている。神話で月へ逃げたとされる、女神の名に由来しているらしい。

彼女たちがたどり着いたであろう最終的な場所で、私たちが、その痕跡自体を見つけるのはさほど困難ではなかった。にもかかわらず、ただそのあまりにも長い時間経過によって、その詳細な彼女たちの到着の過程を把握するまでには相当時間がかかった。いまでもその多くは靄がかかった状態ではあるものの、私たちは科学的で多様な調査によって、断片的な痕跡をつなぐことができる。ただこれも、正確なものかどうか、そうして時代が進めばあるいは解釈が変化するものなのか、明らかではなかった。

当時船に乗ってさまざまな地を巡り、あらゆる場所にたどり着いた彼女たちは、最終的な場所で永遠の寿命を得たと暗喩的に語られる。ただ、最近になって彼女たちのそれはせいぜい地球にい

たころの三倍ほどだったのではないかと考えられている。長寿化は多くの場合、彼女たちの知識の発展と化学的生活の実践によるものだという理由が語られるけれど、私はそれだけでなく、地球の社会においてそもそも彼女たちが大きな負担を強いられていたからではないかと考えている。彼女たちは月で、自分たち自身で清潔なコミュニティを作りあげ、お互いの健康を管理しあい慈しみあいながら長生きし、次の女性たちが来るのを待ち、知恵を引き継いでからその命を全うしたとされている。

その連綿が途絶えたのが、ちょうど稲作による定住と時期を同じにしていたのはただ偶然だったのかもしれない。それでも時間をかけて老いていった彼女たちの待つ長い間に、ついに新しい船はやって来なかった。

長く経って、彼女たちがみんな待ちくたびれて、すっかりいなくなってしまった後になってからここにふたたびやってきた船の中にいた人類は、たくさんのトウモロコシを赤い乗り物で刈り取る、地球の大地を制した新しい国の男たちだった。子どもの頃からピーナッツバターをたっぷり塗りつけたトーストをたくさん食べ、よく鍛えられた大きな体をした彼らは、彼女たちがはるか昔に耕してきた――その時にはすでにすっかり荒れ果てていた――その土地に足跡をつけ、その足跡を撮影して帰っていった。

その後またさらに長い長い時が経った後になって、いま、私がその荒れ果てた場所、足跡のもっと下に広がっていた「彼女たちの痕跡」を調査し始めるまで、姿を失った彼女たちは、それでもずっと待っていたのかもしれない。

彼女たちは、どういう気持ちで『新しい種を運んでやって来る船』を待ち続けただろうか。毎日昇る地球を見ながら地球の植物を育て、数日に一度だけ、カロリーの高い焼き菓子を小さく切り、濃く淹れた発酵茶と共に食べる。油分の高い熱量のある食べものをほんの少しだけ食べるだけなら、ほとんど排泄にも回らない。訓練した彼女たちは、ゆっくりと自分の体を生かしていた。時間をかけて循環させながら暮らし、その中で、新たな『種の船』を待っていたのだろう。

私はかつて彼女たちの生活していた跡に降り立って、遠く周囲を見わたした。前回の調査からずいぶんと軽量化されたスコープのダイヤルを注意深く合わせて周囲の測量を始める。

こんなふうにずっと考古学的な憧憬を抱きながら来たけれど、今回、私たちの目的は考古学調査じゃなかった。船のタラップのほうを振り返ると、チームの仲間が降ろした機材が重力の少ない場所特有の緩慢で慎重な動きで展開され、私たちの船に積んだ種を植える場所を決定するための準備に取り掛かっていた。

ごくささやかなお茶会の間おそらく彼女たちの目に映っていた

のは、今となってはもう跡形もない彼女たちの船、当時は繁った植物に埋め尽くされオブジェとなり果てていたであろう船の姿だったかもしれない。

そうして、その船の後ろから、いま私たちが見上げているのと同じ丸く透きとおった斑模様をした、蜻蛉玉みたいな地球の姿が空に浮んで見えていただろう。


**高山羽根子**

SF作家。多摩美術大学美術学部絵画学科を卒業。二〇〇九年に「うどん キツネつきの」が第一回創元SF短編賞の佳作を受賞。二〇一四年には、同作を表題にした短編集『うどん キツネつきの』（創元SF文庫）を刊行。『うどん キツネつきの』は第三六回日本SF大賞最終候補に選出された。二〇一六年には「太陽の側の島」で第二回林芙美子文学賞を受賞。二〇二〇年に第一六三回芥川龍之介賞を受賞した沖縄を舞台にしたSF『首里の馬』（新潮社）や、武器としての、そして祈りとしての映像と女性たちの姿を描いた『暗闇にレンズ』（東京創元社）などに見られる、ノンフィクションのような語りから思わぬ飛距離を見せる誠実なSF的想像力が本作でも発揮されている。近著は『ドライブイン・真夜中』（U-NEXT）など。


## KAGUYAの理念

全文はこちら

### ① 社会の声に耳を傾ける

より多くの人に安心してフィクションを楽しんでいただけるよう、例えば、国籍や宗教、年齢や職業、性別やセクシュアリティといった個人の属性によって、作品の作り手／読み手から排除される人を出さない為に、作品を生み出す「場」を作っている立場から、社会問題と向き合い、どのような場づくりをすべきかを考え続けます。

### ② 経済と向き合う

書き手の生活を支えられるような事業体になっていくことを目指します。適正な原稿料を支払うことはもちろん、長期的な視野を持ち、これまでの事業を発展させていくと共に、映像化等のアダプテーション事業やイベント開催、その他の関連事業にも取り組んでいきます。

### ③ 世界に開かれたSFレーベルに

書き手や読み手と一緒に、世界に目を向けます。掲載・受賞作品を多言語へ翻訳し海外に売り込みます。さまざまな言語で書かれた作品やマイノリティの声を届ける作品を積極的に紹介します。さらに、著訳者の原稿料や印税について、搾取構造に加担しない持続可能な体制を模索します。

カバーデザイン　浅野春美

私の船に植わった梅の木から赤ちゃんが生まれた日を、昨日のことのように覚えている。鞠のようにふくれた実から抱き上げられた子たちはとても可愛かった。赤ちゃんは生まれた瞬間に肺で呼吸をはじめ、その吐息からは梅がほんのり香っていた。

梅は交配茎に船民たちの養分を蓄えて、新しい命を生む。その年に梅の木で成人の儀をおこなった船民は八人いて、赤ちゃんは三人生まれた。誰が親なのかわからないから、どの子も船内の家々を順番にまわって育てられる。

赤ちゃんのことを話すとリョウはただ「柳の木は好きじゃないんだよな」なんて言った。リョウの船の柳からは、かたい鱗に覆われてくるんと丸まった子が生まれるらしい。一度でいいから見てみたいけれど、互いの船を行き来すると大人にひどく叱られる。

遠い昔、まだ人が陸地に住んでいたころ、船は都市ではなく移動手段だったそうだ。船が住まいに変わったのは、人がこの星の外へ出るようになったからだという。

人びとは船を空に浮かばせる力を得ると、理想郷を求めて遠い月へと漕いでいった。炎と毒物に覆われ、生き物を拒んだ陸地から逃げるために。残された人びとは植物を積んで海に出た。

私たちのコロニーの本船はその後もいくつかの船を飲み込んで、さらに大きくなった。梅の木から生まれた子供はみんな、十を数えるまえに死んでしまった。海からもらう病に耐えられなかったのだ。

私たちの命が終わるとき、肉体は植物に取りこまれて船の一部となり、魂は月へ帰るのだという。

かんかんかん、と周辺を並走する小型船から警戒の鐘が打ち鳴らされる。

前方に巨木を抱えた鋼鉄の植物船が見えてきた。全長五〇メートルほどの、さほど大きくない船だ。海面に無数の花びらを散らして逃げている。

「花粉散布、用意！」

物見櫓から指示が飛んで、私は三味線を手に街路に仁王立ちをする。甲板に敷きつめられた石畳の上に、木造の寺院と住宅が密集している。

蔓で編んだ弦を鳴らしてやると、街路に整然と並んだ薄紅色の梅が花粉を撒きはじめた。すぐに大人たちが駆けてきて、鼓や歌で演奏に加わる。周囲のコナラも幹を揺らし、どんぐりを海へと落としだす。

私たちの巨大な植物船コロニーの中央部を貫いて群生するマングローブが、海面にその影を落としている。高さ六〇メートル、コロニーの全長は三〇〇メートルを超える。何艘もの船が合流し、互いを蔦や根で繋ぎ合わせ、船の上に船を積み、ひとつの大規模な生態系を成している。

海水を吸い上げて自力で航路を推進する植物たちが花粉や毒を飛ばし、周囲は太陽光を遮るほどに霞む。ようやく相手の船は逃げるのをやめた。

私たちのコロニーからは船民たちが次々と這い出してくる。鰭をばたつかせて歩いたり、流線型のつるりとなめらかな胴をくねらせて突進する、異形の民たち。それらは停止した植物船へと、資源を求めて一様に泳ぎだした。

「トーリャ、一緒に行くか？」

名前を呼ばれて見上げれば、すぐ上層の船からリョウが顔を出している。手を振って合図を返すと、年老いた僧侶が私を見咎めてこちらへ近づいてきた。

「トーリャ、ほかの船の民と親しくしてはいけないよ。あれは柳が生んだ子なんだから」

僧侶の口から何百回と教え込まれた掟が淀みなく紡がれる。

「……わかってる。船を探りに行くのに、数が多いほうがいいから」

それ以上は聞きたくなくて、私は舳先へ向かって駆け出した。空を仰ぐとちょうどリョウが船首から跳躍するところだった。

長く太い尾をもつリョウの身体は七色の鱗に覆われている。鱗のひとつがきらめいて、私の船に虹をつくった。リョウの外見は私とはぜんぜん違っている。

すぐに後を追って私も海へと飛び込んだ。冷たかったのは一瞬で、身体は海水と一体化する。手足の吸盤が開いて水中の喜びをかみしめた。

リョウの船と私の船は言葉を通じあわせ、ともに狩りをおこない、資源を分けあう仲間でもある。けれど梅に実らない以上は違う生き物なのだから、深く交流するなと厳しく言われてきた。
それでも毒に耐性がある若い世代は私とリョウの二人きりだから、捕らえた船に渡るのはおおかた私たちの役目になる。幼いころからともに過ごすうちに、私とリョウは互いをもっとも信頼するようになった。

船は何十年も手入れされていないのか、そこらじゅういろんな植物で埋め尽くされていた。
花が咲き、実が生り、種を落とす。船民の子供を実らせていない植物たちが、静かにみずからの命を燃やしている。
私たちはときどき根につまずきながら、熟れすぎた果実を麻袋に詰めた。
「ここ最近、柳にも肥料をやれないからみんな苛立っているよ」とリョウはため息をつく。
「古い船だし、もう少し奥も探ってみようよ」
むっとするような蜜の香りを頼りに暗い船内を進んでゆくと、リョウが立ち止まって声をひそめた。
「何かいる」
リョウの指差す太い根の下に何かが倒れている。
近寄ってみると、地に伏せているのは船民らしき生き物だ。私たちよりかなり小柄で細い。二本ずつある手足には水掻きが確認できず、体毛にも覆われていない。
「コロニーでは見ない種族だね」
肩の部分を叩いてみると、コンコンと鳴った。
「すごい、これ人形だ！」
あまりに精巧なので半信半疑であちこち叩いてみたけれど、やっぱり木よりも軽い音が鳴る。
「リョウ、持って帰ろうよ」
「気味が悪いな。叱られるぞ」
「じゃあ基地に隠しておこう！」
「絶対嫌だ！」
リョウはしばらく粘ったけれど、結局は私の好奇心に折れた。
人形は見た目に反してとても重く、二人がかりで背負って帰った。

リョウの船の底には菩提樹が茂っていて、葉をかきわけると今にも朽ち果てそうな屋形船が現れる。私たちの秘密基地だ。
木組みの床に横たえると、人形はただ眠っているように見えた。
葉の隙間から光が差し込む。
「――正常に再起動しました」
人形が目を開いて意味のある言葉を発したので、私とリョウは「生きてる！」と驚いて飛びのいた。

「……光に当ててくれてありがとう」
そう言って上体を起き上がらせる姿はとても人形には見えない。
「船民なのか？」とリョウがたずねる。
「ぼくは人の手で作られた水先人だ」
「水先人？」
私はもっと間近で観察したくて、じりじりと距離を詰めてみる。リョウは壁にぴたりと張り付いたままだ。
「船の仲間はどうしたの？」
手で触れられるほど近付いてみても、相手は攻撃するそぶりを見せない。
「とうに死んでしまった。ぼくは長いあいだ一人きりで、次の世代の命を抱えた植物を守ってきた」
「船民がもういないのに、どうして……」
子供たちの命だけが繋がれたとしても、生きてゆけるとは思えない。
「船民が絶えても、寿命の長い植物は蓄えた遺伝子を運んでいける。安全な船に植えてやりたい」
そんなことが許されるはずがない。
「違う植物からは違う生き物が実るんだから、コロニーに植えるのは無理だよ」
ほかの船から飛来した植物が芽吹けば、私たちは真っ先にその交配茎を断ち切る。そうやって船民を宿す能力を失わせた植物たちを、実りに感謝して育てるのだ。自船以外の植物に受胎をゆるすのは、異形の民を受け入れることだから。
水先人は「もしも同じ生き物だったら……」と口にして、「……昔の話をしようか」と視線を落とした。
そして私たちのまったく知らない世界を語りはじめた。

陸地が災害と環境破壊による毒物に覆われたころ、人びとは次の世代を守ろうと子供を育む器官を体内から切り離した。そう、かつては交配に必要なのは性で、人間もクジラとおなじく、子宮で子供を育てていたんだ。
人びとは遺伝物質を蓄えられる交配茎を作り、植物に受胎機能を託した。こうして船に乗せられた植物は本来の実とともに、人の実を宿すようになったんだ。
植物は特定の周波数や振動に反応して種を蒔き、別の船に新しい命を運んだ。そこで出会った船民たちとの子供をまた実らせる。そうやって植物船は栄えてきた。ぼくの船の子供たちも、たくさんの船に蒔かれていった。
「こうして人類は、植物から誕生する唯一の生き物になったんだ」
さざなみのように響きわたる声がやんで、私は我にかえった。
「じゃあ、コロニーの異形の民たちは……」
「君たちも、君たちが異形と呼ぶ船民たちも、もとは同じだった

んだよ」
冷や汗が首の後ろをつたう。喉がきゅっと閉まって返事ができない。
リョウがかわりに沈黙を破る。
「お前の話では、別の植物から生まれる船民どうしで子を作っていたんだろう。なぜ今、多くの船ではそれを禁じている？」
「長いあいだ隔離された環境にさらされると、種（しゅ）は分化する。人はありとあらゆる植物に実ることができるけれど、分化してしまった船民どうしで子供は生まれない。だから最初から、他船の植物や船民を受け入れない船が増えてしまった」
種が分たれたのかどうかは、試してみなければわからない――掟に縛られて他船との交流さえわずかだった私にとって、水先人の言葉はあまりに衝撃的だ。
「お前の船の主人たちも、私たちとまったく違う外見だったのか？」
リョウの問いに水先人はどこか悲しげに微笑んだ。
「……古代の人びとは、自分に似せてぼくを作ったんだよ」
夜になると私は船を抜け出して、巨大な本船にへばりついている根のひとつによじ登って腰掛けた。近くの蔓植物から新しい三味線を編む。大きな月が昇り、植物たちは一様に真っ白く照らされている。
あの月には古代の人びとが目指した理想郷があるのだろうか。
気付けばリョウが隣にやってきて、穏やかな歌を口ずさんでいる。その発音は私には意味のある言葉に聞こえず、それでも旋律はひどく甘やかだ。
できたばかりの三味線で演奏に加わると、私たちの音を感受した若いバオバブが近くでほろりと咲く。リョウはその実をもぎってかじり、取り出した種を放り投げた。種は数秒で海面に落ち、着水した部分から夜光虫たちが波紋を広げるように青く輝いてゆく。
「あいつのことを気にしているのか」
リョウはときどき、私の思考が読めるみたいな言葉をくれる。
「……水先人が古代の人に似ているのなら、きっと私たちも異形なんだね」
「私はトーリャの姿が好きだよ」
そう言ってリョウは身を寄せてきた。
いつも冷たいリョウの鱗は触れたところからだんだん私と同じ温度になり、やがて自分との境目がわからなくなる。
私たちは傲っていたのだろうか。コロニーの船民を自分たちとは違うものとして、区別できるなどと思い込んでいた。水かきの大小、肺活量の差よりも重要な身体の差とはなんだろう。
月が雲に隠されてあたりが闇に包まれる。
「危ない！」

リョウが突然、私の手を引いた。がつん、ぼちゃんと根に硬いものが当たって海に落ちた。すぐにもうひとつが飛来して、リョウが声を荒げる。

「攻撃されてる！　トーリャ、船に帰って花粉を！」

「リョウ……！」

駆け出した背中に声を掛けてもリョウは振り返らない。私はわけもわからず自分の船へと飛び降りた。

街路は闇に覆われている。黒く沈む海上に敵の姿は確認できない。仲間たちが異変に気付いて飛び出してきた。

三味線を奏でると、すぐに梅もコナラも幹を鳴らして枝を広げる。甲板には小さな種が降り続けている。

足元のひとつを拾い上げる。白くふわふわとした毛にくっついた種には見覚えがあった。

「柳……」

はっとして空を仰いだ。月が雲から現れて、ふたたびコロニーは照らし出される。実を落としているのは、すぐ頭上のリョウの船だ。

「そんな！」

このままでは梅はリョウの船に危害を加えてしまう。とっさに自船の木々を鎮めようと、三味線の拍子を遅らせた。

――でもそうしたら、私たちは梅とともに死に絶えるのだろうか。

木の実が雹のように街に降り注ぎ、穿ち、根を生やそうと地面に転がる。相手は本気でこの船を侵略しようとしている。

仲間たちの怒声が空気を震わせ、鼓や歌は甲板に響き渡り、すべての植物が一斉に開花する。木々が領域を争って、周囲は大量の花粉に覆われる。

大人たちは本船の壁を伝ってリョウの船へと這い上がりはじめた。

その喧騒のなかで、ひとつの旋律が私の耳に飛び込んできた。凶暴な歌にかき消されそうな音色。たとえ理解から遠い言葉でも聞き違えるはずがない。

その歌を追って菩提樹の根へよじ登ると、葉の陰で声を張り上げるリョウがいた。一人で柳の暴走を食い止めようとしている。私を映すリョウの瞳からは涙が滲みだす。

「トーリャ、ごめん。知らなかったんだ。柳の栄養が足りなくて、子供を生むために土壌を広げるんだって……」

リョウは私と仲が良かったから、襲撃について知らされなかったに違いない。

「止めようとしたけど、柳に歌が届かなくて……！」

「信じるよ。私はリョウを信じる」

私たちは互いを抱きしめ、崩れかける屋形船に転がり込んだ。

暗闇のなかでも水先人の瞳は開いていて、眠る必要などないようだった。
息を切らせ、肩を寄せ合う私たちに、水先人は浅い海のように穏やかな眼差しを向けている。
「君たちに見せたいものがある」
水先人は胸元に手を当て、生き物ならば心臓がある部分を扉みたいに押し開けた。柔らかそうな肌の下に、茶色く太いものが植わっている。
「これは筍といって、竹と呼ばれる植物の若芽だ。地下で自身のコピーを増やして成長する。船と船とを貫いて、より強固に繋ぐだろう。人工植物のなかでもとくに成長が早いから覚悟したほうがいい。およそ百年の寿命があって、枯れる直前に種を蒔く」
しばらく呆気にとられて、私たちはようやく理解した。この若芽こそ、水先人がずっと守ってきた子供たちの命を乗せた植物なのだ。
「誰にも言わずに海に沈めてもよかった。生き残った世界で、子供たちが異形の民と恐れられて迫害されるくらいなら。でも君たちならばこの命を育ててくれるかもしれないと、ぼくは思っている」
水先人の守ってきた命にとって、このコロニーで暮らすことが幸せなのか、私にはわからない。
「昔の人が陸地を捨てて月に行ったのは、飢えも苦労も、身分も争いもないからって本当?」
「それは大きな勘違いだ。たしかに昔は豊かだったけれど、宇宙を目指した世代にも争いはあったし、互いを理解しあっているわけではなかった」
水先人の瞳は菩提樹の向こうを見つめている。
「旧時代の人類がほんとうに理想郷を手に入れていたら、月面基地からいつか迎えが来たかもしれないね。僕の通信記録では、宇宙からの信号はもうずっと前に途絶えている」
語られる内容は私の理解の外にある。けれどその声を聞いていると、周囲の喧騒が遠くに感じられた。
「子供たちを引き受けてくれるなら、ぼくにも音楽を聞かせてほしい」
「……芽が成長したらあなたはどうなる?」
「死にはしないよ。人造蛋白の身体は壊れても植物の養分になるし、ぼくの魂もきっと月に帰るだろう」
答えを口にできずにいると、リョウが近くに来て手を握ってくれた。その目はまっすぐ私を射抜く。
はじめて出会う植物にも私たちの音楽は響くのだろうか。
私は三味線を、リョウは超高音の歌を、異なる旋律はしだいに調和する。長いときを経て命を刻み始めた筍が、水先人の胸の内側から急速に芽を生やしはじめた。
あまりの成長速度に私たちは手を繋いだまま屋形船を飛び出し

て、菩提樹の根にへばりつく。水先人はみるみるうちに緑に覆われる。
竹は硬く太くみしみしと音を立てて伸び、私の船とリョウの船にぶち当たり、穴を開けて貫いた。
「船が……」
両船の船民たちは見たこともない植物の侵食に驚いて退避する。煙る花粉のなかを突き進む、竹の成長音だけが凪いだ海に響きわたった。
やがてコロニーじゅうの船民たちが這い出してくる。月へ向かわんばかりに伸びる竹を、私たちは固唾を飲んで見守った。

東の水平線が白んで、竹林がきらきらと輝きはじめる。
数ヶ月をかけて二〇〇メートル以上に伸びた竹はコロニーの船を次々と貫き、あらゆる植物の種を運んだ。今やどの船にも交配茎を有した他船の植物が根を生やしている。
リョウと二人で船の舳先に降り立つ。周辺には柳、紅葉、ニワトコ、ヤシなど多種多様な人工植物が根を張っていて、街路には変わらず梅が凛と立っている。
甲板を貫く、とくべつ太い竹のひとつが内側に養分を与えきって、痩せ細った皮の向こうから朝日を透かしている。まるで黄金を抱えているみたいだ。
私は古い鎌を思い切り振る。二度、三度と入れると水が漏れ出してきて、七度目で竹は真っ二つに折れた。
地に残った竹の片割れから、両の手ですっぽりと包めるほどの赤ちゃんを抱き上げる。鱗にも体毛にも覆われていない、海で生きるにはあまりにももろく、壊れてしまいそうな命。水先人によく似ている気がした。
覗き込んでくるリョウに「私ね……」と、一呼吸おいて決意を口にする。
「私、竹で成人の儀をおこなうはじめての船民になろうと思う」
梅は今でも好きだけれど、新しい船民と植物が、きっと私たちのコロニーには必要なのだ。
ゴツゴツした手が私に触れた。
「一人で覚悟決めました、なんて言うなよ。水くさいな」
びっくりして見返すと、リョウは子供みたいに笑った。
「私とトーリャの子が実れるかどうかはわからないけど」
それでもいい、と互いの手を強く握る。
時代も起源も違うとしても、私たちはひとつの船に乗り込んだのだ。
リョウが柔らかな声で歌いはじめる。その主旋律に呼応するように、近くの船からかすかに低い歌声が聞こえてきた。耳をすませば知らない楽器の音色が、はじめて聞く拍子が、ゆるやかに演奏に加わっている。祝福の歌でコロニーは芽吹いてゆく。

百年後に竹が命を終えて花開くころには、私たちのコロニーはきっとその種を受け入れる準備ができているだろう。

腕に抱いた赤ちゃんが力強く泣いた。柔らかな肌に頬を寄せると、ふっくらとあたたかい。

私たちの未完成な船に愛され、愛してくれるといい。

いつか月へ帰る、その日まで。

佐伯真洋

一九九一年生まれ、大阪府出身。二〇一六年、初めて書いたSF小説「母になる」が第四回日経「星新一賞」で最終候補に選出される。同作の Toshiya Kamei による英訳 "Becoming a Mother" は *Weltkin Magazine* に掲載された。二〇二〇年には卓球SF「青い瞳がきこえるうちは」が第十一回創元SF短編賞の最終候補に選出される。同作は、伴名練編『新しい世界を生きるための14のSF』（ハヤカワ文庫JA）に収録された。第一回かぐやSFコンテストでは「いつかあの夏へ」で読者賞を受賞。その姉妹編「かいじゅうたちのゆくところ」を井上彼方編『SFアンソロジー　新月／朧木果樹園の軌跡』（Kaguya Books）に寄稿。本作「月へ帰るまでは」に見られるような、人と人がつながることへのあたたかい眼差しと、粘り強い希望が持ち味の一つ。


# Virtual Gorilla+

## 月間読者数 100万人
## 月間ページビュー数 140万PV

VG+ (バゴプラ)は、SF作品を通して生きる知恵やヒントを提供する次世代のウェブメディアです。

「if」の世界を描く思考実験を通して、人間が考え、思いを巡らせる、つまり思考することを力強く後押ししてくれるのが、SFというジャンルが持つ力です。映画・ドラマ・ゲーム・小説などのSF作品を紐解き、多くの人に紹介していくことで、より開かれた社会を作り出せると信じています。

https://virtualgorillaplus.com

KAGUYA SF Contest

# かぐやSFコンテスト

## 第一回「未来の学校」

大賞：勝山海百合「あれは真珠というものかしら」が大森望編『ベストSF2021』（竹書房）に収録。Toshiya Kameiによるスペイン語訳がアルゼンチンのSF誌*Axxón*とキューバのSFファンタジー誌*Korad* 第38号に掲載。
審査員特別賞：坂崎かおる「リモート」の英訳“Remote”（訳：Toshiya Kamei）が*Daily Science Fiction*に掲載。

## 第二回「未来の色彩」

大賞：吉美駿一郎「アザラシの子どもは生まれてから三日間へその緒をつけたまま泳ぐ」の中国語訳「曾经，小海豹出生后能拖着脐带游三天」（翻訳：田田）が『科幻世界2022年3月号』に掲載。

## 第三回「未来のスポーツ」

大賞：暴力と破滅の運び手「マジック・ボール」の田田さんによる中国語訳が中国の媒体に掲載予定。
受賞作品・最終候補作品と選評をまとめた冊子を刊行。
第三回かぐやSFコンテストの最終候補者らによる書き下ろしアンソロジー『新月２』を2024年にKaguya Booksから刊行予定。

### 第一回・第二回の最終候補者らによる書き下ろしアンソロジー

**SFアンソロジー 新月 朧木果樹園の軌跡**

井上彼方 編

勝山海百合・坂崎かおる・三方行成・十三不塔・正井・他

二七〇〇円＋税

生きたまま襟巻きになるキツネ、世界を再創造する検閲、時を駆ける寿司、オレンジ様を育てるドローン……知らない世界を旅してみたら、心がちょっと軽くなる。

**第三回かぐやSFコンテスト 最終候補作品集**

一五〇〇円＋税

# 『トムは真夜中の庭で』

著・フィリパ・ピアス　訳・高杉一郎

## 自由になれる、秘密の場所で

子供の頃、夜は特別な時間だった。家族に「おやすみ」といって自室に引っ込んだあと、ぬいぐるみたちと秘密のおしゃべりをするのが好きだった。起きていることに気づかれないように布団をかぶって懐中電灯をつけて、大好きな小説の続きを読むこともあったし、頭の中でお話を作ってどんどん繋げていくうち、いつのまにか夢の中に足を踏み入れていることもあった。窓から月が見えるときは、カーテンを開けて、月明かりの中で小さい頃の絵本や魚の図鑑を眺めるのが好きだった。しらじらとした月の光の中では、見慣れた自分の部屋が、じぶんだけが知っている秘密基地のように思えたものだ。

作家フィリパ・ピアスによって百年前に書かれた児童文学『トムは真夜中の庭で』は、そんな「秘密の場所」への憧れを呼び覚ましてくれる作品である。

弟がはしかにかかり、母の妹の家に隔離されることになったトム。いかにも退屈な叔母と叔父の家にがっかりしていたが、真夜中、柱時計が十三時を打つのを聞く。驚いてベッドを抜け出したトムを待っていたのは、月明かりに照らされた玄関ホールと、昼間はなかった、庭に通じるドア。庭でトムはハティという一人の少女と出会い、友達になる。

それ以来、夜になるたび月明かりをたよりに玄関ホールを横切って庭に出るトムの前に、ある時は幼い女の子、ある時はトムよりも大きい少女、またある時は大人の女性と、ハティはいろいろな年頃の姿で現れる。ハティは何者なのか、なぜ庭は真夜中にだけ現れるのか。夜ごと謎を追うトムに見えてくる真実とは……。

邦題のとおり、小説の主人公はトムという好奇心旺盛な少年だ。しかし、大人になって読み返してみると、この物語はハティという一人の人間の人生を、トムという語り手を通して描いていることに気づく。喪服を着て泣いていた小さな小さな女の子が、決して自由ではない少女時代を送り、大人になる。身寄りがなく、邸宅の庭だけを友として育つハティが、それでも聡明で豊かな想像力を持っていることが、トムとの会話を通じて存分に表現されている。

「こんどは、ここからのぞいてみない？」と、ハティがいった。

ふたりは目をすぼめて、彫刻のあるガラスからのぞいた。

「星のところからだと、なんにも見えないや。」と、トムががっ

かりしたようにいった。

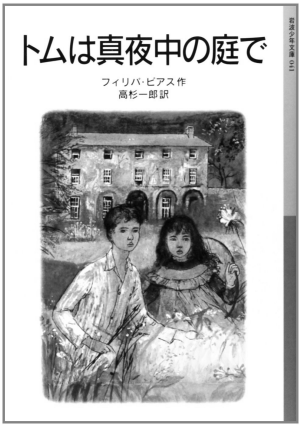
「ときどき、わたしはそのガラスがいちばんすきになるの。」

と、ハティがいった。「のぞいてもなんにも見えないから、庭園がないんじゃないかと思うでしょ。だけど、庭園はいつでもちゃんとあって、わたしを待っててくれるんですもの。」

（一二三ページ）

ハティの秘密の庭は、間違いなく美しいのだが、決して秩序だてて剪定され、管理された庭園ではない。それぞれの草木が命を誇るように育つ庭は、ハティの自由な精神そのもののよう。ハティにとってトムが大切な存在であることは間違いない。しかしトムによってハティが変わったり、何かを成し遂げたりするわけではない。あくまで「見ているだけ」のトムの目線でハティを描くことで、著者はヴィクトリア朝の終わりを生きたたくさんの女性たちのこと、その女性たちがそれぞれ固有の人生を送ったことを伝えようとしていたのではないか。

実在していたか、架空のものかに関わらず、子どもの頃の私たちはみんな「秘密の庭」を持っていたはずである。きっと今も持っている。あかあかとした太陽の元でも、生活を照らす蛍光灯の下でもない、真夜中の、淡い月光をたどって辿り着く場所。そこでなら自由になれるし、特別になれる。本当はいつだって誰だって、誰も見ていてくれなくても自由だし、特別なのだけれど。




トムは真夜中の庭で
著・フィリパ・ピアス　訳・高杉一郎
岩波少年文庫／ 2000 年
定価：792 円

堀川夢・一九九三年生まれ、北海道出身。編集者、ブックキュレーター、ライター。得意分野は海外文学。「岸谷薄荷」名義で、ジェーン・エスペンソン「ペイン・ガン ある男のノーベル賞受賞式に向けたメモ」、R・B・レンバーグ「砂漠のガラス細工と雪国の宝石」（いずれもKaguya Planetに掲載）、ジェニー・カッツォーラ「パーティトーク」（井上彼方・紅坂紫編『結晶するプリズム 翻訳クィアSFアンソロジー』収録）の翻訳や創作を行ってきた。フェミニスト。

# バゴプラ ライターズルーム

《Kaguya Planet》を運営するＶＧプラス合同会社は、二〇一八年にＳＦメディアのバゴプラの立ち上げと共にスタートしました。バゴプラでは小説、映画、アニメやゲームなど、ＳＦジャンルの様々なコンテンツのニュースや解説記事を配信しています。《Kaguya Planet》マガジン版では、バゴプラのライター陣が得意とするＳＦ映画などの映像コンテンツを各号のテーマに沿って紹介しつつ、そのテーマについて「考察」するコラムをお届けします。

## 月とスーパーパワー

齋藤隼飛

《Kaguya Planet》マガジン第０号のテーマ「月」で最初に思い出すのは、今年の夏に参加した鳴門ＳＦミーティングの翌日に井上彼方氏、北野勇作氏と「鳴門の渦潮」を見に行った時のことだ。鳴門のタクシー運転手に聞いた話では、渦潮は春と秋の新月と満月の時に最も大きな渦になるという。潮の満ち引きは月の引力によって生まれているのだから当然と言えば当然だが、私たちが住む地球から約三八万キロ離れた月の存在を鳴門の渦潮によって改めて身近に感じた。

そうした「月の力」はサイエンス・フィクション作品にも取り入れられている。ＭＣＵドラマで実写化された『ムーンナイト』の原作コミックでは、月の神コンスと契約した主人公マーク・スペクターの力が月の満ち欠けに同期して増減するという設定があった。アニメ『セーラームーン』では主人公の月野うさぎの前世は月の王国の王女で、月を守護星に持つ。アナ・リリ・アミリプール監督の映画『モナ・リザ アンド ザ ブラッドムーン』では、主人公のモナ・リザは皆既月食で月が赤い満月になった夜に特殊能力に目覚める。

このように月からスーパーパワーを得るという設定は様々な国のＳＦ作品で取り入れられてきた。一方で、英語の「スーパーパワー」という言葉には「超大国」という意味もある。

一九〇二年に公開された「世界初のＳＦ映画」と言われるジョルジュ・メリエス監督の『月世界旅行』は、天文学者たちが巨大な大砲に打ち出されて月へ行くという物語だ。月面への到達が人類にとってまだまだ空想の域を出ないものだった時代には、月へ行くことはまさにＳＦの世界の物語だった。二〇一八年公開のデイミアン・チャゼル監督の映画『ファースト・マン』では、ニール・アームストロングの伝記を原作に国家の代表ではない一個人としてのアームストロングの姿を描き、米国の保守層から批判を受けた。保守派の米国人にとっては、月への到達はいまだに国家の威信を象徴する物語だったのだ。ところが、二〇二三年八月にはインドの無人探査機が世界初となる月の南極への着陸に成功した。現実における月とスーパーパワー＝超大国の関係は変わりつつある。

超大国の政府や政治家が陰謀論に染まる時代だ。マイケル・ベイ監督の『トランスフォーマー／ダークサイド・ムーン』やティモ・ヴオレンソラ監督の『アイアンスカイ』といったＳＦ映画では、「月の裏側」が悪党たちの陰謀に利用された。私たちは身近でありながら自分の位置から見えないものに対して想像力を豊かに働かせてしまう。闇の中で私達を照らしてくれているはずの月が、現実において陰謀論に利用されないように目を凝らしておかなければならない。

日本の特撮ヒーローの元祖と言われる『月光仮面』においては、シンボルの三日月には「悪人をも照らす」という意味がある。白昼の空に輝く太陽には救われない私たちのような夜行性の生き物には月の存在が不可欠だ。世界が闇夜のような暗黒の時代にある中で、Kaguya Planet がより多くの人に光を与える月のような存在でいられることを願ってやまない。それこそが Kaguya Planet のスーパーパワーだと胸を張って言える日が来るまで走り続けよう。

齋藤隼飛・ＳＦメディア・バゴプラで多数のＳＦ作品の解説・考察記事を執筆している。一九九一年生。社会保障／労働経済学を学んだ後、アメリカはカリフォルニア州で四年間、教育業に従事。アメリカではマネジメントを学ぶ。編著書に『プラットフォーム新時代 ブロックチェーンか、協同組合か』（社会評論社）。正井編『大阪ＳＦアンソロジー：ＯＳＡＫＡ２０４５』（Kaguya Books／社会評論社）の編集を務める。

# 「月」が私に運んでくれたもの

鯨ヶ岬勇士

はじめにKaguya Planet第0号に愚見を寄稿させていただける機会をいただけたことを感謝したい。昨年八月に齋藤隼飛氏からバゴプラで記事を書いてみませんかとお誘いを受けてから約一年、私は新人のライターとは思えないほどの幸運に恵まれた。自分が好きだった「トランスフォーマー」の公式ムック本の本文テキストとスペシャルアドバイザーになれたのはその良い例だ。そして今回の「月」というテーマ。大学時代に文化的に見る「月」に関する論文を書き、本名も月にまつわるものである自分としては運命めいたものを感じた。

SFからは少し離れてしまうかもしれないが、古くから文化的に「月」、特に「三日月」は「豊穣」と「死」という二つの面を持つシンボルとして扱われることがあった。「三日月」は角を連想させ、牡牛などのイメージにつながることがある。牡牛は牝牛のようにミルクなどは搾れず、それどころか暴れると危険な角を持った存在である。ヤマタノオロチ退治で有名な日本神話のヒーローのスサノオノミコトも神仏習合で牡牛の頭を持った牛頭天王と同一視されるようになった。牛頭天王は豊饒国の「武答天皇」の太子なのだが、その身長は七歳にして七尺五寸（約二二七センチメートル）の巨躯に三尺（約九〇センチメートル）の牡牛の頭、同じく三尺の真っ赤な角を生やしているとされ、その姿はギリシャ神話において迷宮に封じ込まれていた牛頭の怪人「ミーノータウロス」を思わせる様な怪物めいたものである。

彼は父から王位を継いだ後に、一羽の山鳩に導かれて龍王の三番目の娘「婆利采女」と結婚する。その後の彼の行動は千人の僧侶を「読経をしている際に居眠りをしていた」などの些細な理由で、彼らの一族郎党をまとめて皆殺しにするなど、暴力的な悪神や邪悪な疫病神そのものといえる。ヤマタノオロチを倒してクシナダヒメを救ったスサノオノミコトというヒーローと同一視されていたとは思えない凶暴さだ。

しかし、その一方で牡牛の力強さは農地を耕す豊穣につながるものでもあった。和歌山県東牟婁郡那智勝浦町那智山の熊野那智大社では例祭「扇祭り」の太鼓と笛の音に合わせて田を巡る「御田植え式」が行なわれ、そこでは農具としての牡牛を擬人化した木製牛頭「カイガ・エブリ」が登場する。「豊穣＝生」と「荒れ狂う猛々しさ＝死」という二つの矛盾した性質を持つ「月」。これが大学時代の自分の「月」に関する一つの見解だ。

ここに大学卒業後にライターとしての目線で作品を見るようになったことで生じた愚見を述べさせていただきたいと思う。「月」が持つ「生」と「死」に次ぐ第三と第四の意味。それは「慈愛」と「主体性の無さ」ではないだろうか。「月」の中でも特に「満月」は闇夜を照らしてくれる存在であり、明かりの無い時代から私たち人類にとっては暗闇から救い出してくれる存在だった。それが「慈愛」へと繋がり、闇といった負の面を照らす存在のシンボルになったと考えられる。

日本のヒーロー番組の元祖は月光菩薩をモチーフにした『月光仮面』であり、アメコミのクライムファイターたちの中には月を背景に立つ者も存在している。特に印象的なのは、ティム・バートン監督作『バットマン』でバットウィングという飛行機が空へと急上昇し、雲を突き破り、「月」の前で止まることで「月」とバットウィングが重なりバットマンのシンボルマークになる場面だ。このように月は夜を太陽の代わりに照らす存在であるため、闇に怯える人々にとっての味方だと考えられる。

だが、この愚見にはあくまでも月が「太陽の代わり」であるということが重要になってくる。日本を代表する女性解放運動の先駆者「平塚らいてふ」の『青踏』の発刊の辞から一部抜粋させてもらう。それは「元始、女性は実に太陽であった。真正の人であった。今、女性は月である。他に依って生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い顔の月である。（以下略）」という文章だ。この中で語られているとおり、「月」は「太陽」と比較され、あくまでも太陽の光を浴びて輝いているだけであり、自ら輝いていない。それが「月の客体化」、「月」の主体性の無さにつながっているのではないだろうか。

今回、Kaguya Planet発刊において、寄稿させていただいたのにも関わらず、このような「月」の負の面を語って終わらせたくはない。ここにもう一つ私の愚見を付け足させていただくのならば、「月」は太陽のように自ら輝かないかもしれないが、裏を返せば太陽の光の届かない場所に光を運ぶ存在でもあるということだ。Kaguya Planetはまだ太陽の光が届いていない人々や場所に光を運んでくれるような季刊誌になると私は信じている。何者でもなく真っ暗闇にいた私に愚見の寄稿の機会という一筋の光を与えてくれたことへの感謝と、そしてこの豊穣なるSF作品への祈りに満ちた光がより多くの人のもとに届くことへの願いを込めて。

鯨ヶ岬 勇士・SFメディア・バゴプラで多数のSF作品の解説・考察記事を執筆している。一九九八生まれのZ世代。好きだった映画鑑賞やドラマ鑑賞が高じ、その国の政治問題や差別問題に興味を持つようになり、それらのニュースを追うようになる。趣味は細々と小説を書くこと。『トランスフォーマー／ビースト覚醒 PERFECT BOOK』（宝島社）の本文テキスト及びスペシャルアドバイザーを務める。

- 2020年9月　日本ＳＦ作家クラブの第２０代会長に就任
- 10月　公式サイトのＳＳＬ化
- 日本ＳＦ作家クラブ×清水建設テクノアイコラボ企画「建設的な未来」第一期完結
- 12月　行動規範の発表（翌年一月から運用）
- 2021年4月　「日本ＳＦ作家クラブの小さな小説コンテスト」（さなコン）の創設
- 日本ＳＦ作家クラブ編『ポストコロナのＳＦ』（早川書房）刊行
- 2022年3月　理事会と会員有志によるウクライナに関しての声明文を発表
- 4月　ＳＦカーニバル開催
- 5月　日本ＳＦ作家クラブ編『２０８４年のＳＦ』（早川書房）刊行
- 7月　理事会および会員有志によるインボイス制度への反対声明
- 9月　新会員を五十人以上増やして退任

この他にも……

●顧問弁護士を雇う　●日本ＳＦ大賞の選評冊子の電子書籍化　●会員希望者向けのウェルカムキット作成　●各種手続きや支払いの電子化、オンライン化　●休会制度の制定　●「白鹿亭」の開始

## ■日本SF作家クラブの役割

――日本SF作家クラブの会長時代には多方面に渡って活動をされていますが、通底してどんなことを大切にしていましたか。

**池澤**　（前の日本SF作家クラブの会長の）林譲治さんから私に、次の会長の打診の電話がかかってきまして。誰よりも私がめちゃくちゃびっくりして、「どうして私なんですか」って聞いたら、「理事の時に池澤さんが一番内側と外側の目を持っていたから。今までのクラブは内向きなところがあったけれども、必ずその時に、『でもそれだと外の人からはこう捉えられるかもしれない、言い方を変えてみましょう』とか、『案自体はすごくいいんですけれども、どういうタイミングでどういう出し方をするかを考えていきましょう』とおっしゃっていた」と言われました。やっぱり私は外からの見え方って大事だと思ってたんです。だからそういうことを言うことが多かったんですね。その姿勢っていうのは会長になっても変わらなかったと思います。

会長の仕事って何かなって考えた時に、あの会長がクラブを潰したと言われる覚悟を持つことだと思ったんですよ。私、何かあったらクラブを潰そうと思ってました。例えば、誰かがすごく嫌な思いをしなきゃいけなかったり、誰かの犠牲の上にしか成り立たないようなクラブ運営になるんだったら潰そうって。その時に「あの稀代の悪会長のせいで、日本SF作家クラブの六十年近い歴史に終止符が打たれたんだ。あいつが全部悪い」って言われて、「はい、私が全部悪いです」って言えるようになりたい、っていうか、それを言わないとダメな立場なんだなと思っていました。悪いことは全部会長のせいで、いいことは理事会と会員と事務局のおかげですという気持ちでずっとやっていました。

**私、何かあったらクラブを潰そうと思ってました。**

――外からの見え方というのは、日本SF作家クラブが求められる役割ということですか。

**池澤**　そうですね。あと、なぜ今、それを、日本SF作家クラブがするのかっていうことをきちんと伝えていく。あのー、悪評もあったクラブなので……。でもその悪評の半分は、私から見るときちんと発信をしていないことによる誤解だったと思うんですよ。

なんだったら私は前に出て喧嘩をします。就任直後にTwitter（現X）で公開のバトルをしたのも、私はこの人と話しているように見えるけれども、その後ろで見ている何万人の人に伝えるために利用させてもらう、ごめん、ぐらいの気持ちでした。

そうやって前に出て、みんなに「日本SF作家クラブはこういう場所です。こういうことをするためにいます。だからもしクラブが今の自分にとって必要だと思ったら入ってください。守ります」っていう、ク

ラブの役割と意義を外側にきちんと伝えていくことは絶対的にしなければいけないなと思ってました。

――そこでいう役割と意義とは、日本ＳＦ作家クラブの「定款」にある「目的」のようなことですか。

**池澤**　そうですね。一人ではできないこともクラブという組織があればできるようになるかもしれない、個人では闘えないことについてもクラブの力を使えばなんとかなるかもしれない。クリエイターの集団なんだけど、編集の人もいるし、ＳＦに関わるあらゆる立場の人がいる。なので集合知として必ず役に立つところがあると思います。

――今の社会だからこそ求められる日本ＳＦ作家クラブの役割ってどんなことがあると思っていましたか。

**池澤**　元々親睦団体として設立したクラブなんですけど、そこから一般社団法人化して、互助の意識みたいなものがより強くなってきたと思うんですね。法人だからこそできることっていうのもあるし。私が会長の時に顧問弁護士をつけたんですよ。だから、その顧問弁護士に著作権関係のことを相談することもできます。個人で弁護士に頼むのが難しいと思ったら、クラブの弁護士だったら顧問料の範囲内だったら無料でやってくださいますし、それ以外のことでも、クラブとの関係があればすごく相談しやすいし、お値段的にもそんなに無茶なことにはならないので。

――ふっかけられたりしないという安心感ですね（笑）

**池澤**　そうそう。安心してお願いができますっていう。そういう公的な役割を担ったり、あとは、文芸美術国民健康保険（文美保険）っていうものも、私が会長の時に使えるようになりました。そういう公的な器としての役割をきちんと果たして、私人、個人個人を守っていこうっていう意義ですね。

――使える手段は色々あっても個人だとアクセスしにくかったり、弁護士に相談するにしても、弁護士さんによって得意分野もお値段も違うし、誰に依頼したらいいかわからないとかありますよね。

**池澤**　実際、会員の方に弁護士を紹介して、個人的なお仕事をその弁護士さんにお願いする……っていう事例もありましたし、文美保険も今も毎月のように会員からお申し込みが来て、繋いでいます。

## ■〈行動規範〉の制定

――日本ＳＦ作家クラブの〈行動規範〉は池澤さんが会長になる前から準備されてきて、池澤さんが会長の時に発表・運用されています。内容が素晴らしいので読者の皆さんには実際に読んでみて欲しいのですが、行動規範を定める上で、それが会員やＳＦに関わる人たちの安全や安心に繋がるように、実効性を持たせるために工夫したことってありますか。

**池澤**　罰則がないので、実効性については正直に言うと難しいですね。ただ、日本ＳＦ作家クラブに入る方には必ずあれを読

んでいただいて、「こういう規範を持っているクラブです。その上でお入りになりますか」っていうふうに聞いているんですよ。まず読んでいただくことでそれに意識を向けてもらう。

特にクラブの行動規範の中で一番大事なのって、私は序文だと思ってるんですね。

「日本SF作家クラブ（以下SFWJ）は当会の活動、および活動に参加している会員の行動が、年齢や性別、性自認、性的指向、人種・民族・エスニシティ、出生と先祖の経歴、障害、病状、思想信条と宗教、学歴あるいは職歴と地位、婚姻歴、または国籍と市民権に基づくあらゆる形での嫌がらせ、脅迫、差別のないものであることを希求して、この行動規範を制定します」

ここのこの一文、この中にその時できる全部を盛り込みたかったんです。ここから漏れる人がいないように、全ての人を私たちは同じように掬い取りますって。なのでここに一番時間かけてるんです。例えば、人種と民族とエスニシティ、性別と性自認と性的指向って違うよねっていうことでできるだけ網羅的に列挙しています。それから　行動規範は変わるものなので、変えられるように作っています。

**全ての人を私たちは同じように掬い取りますって。**

――実際、一度変更されていますよね。

**池澤**　そうですね。その時その時によってアップデートをしていこう、特に今の序文のところは、必ずアップデートが必要になるから変えていこうっていうので、定款ではないところに置いています。今後も変わる可能性があります、つねに最新バージョンに書き直していけるように。

これをまず読んでいただくことで、それぞれの会員の中に意識を持ってもらうことっていうのが一番大事なんじゃないかと思っています。

実際、これに反することをする人がいたとしても、今までは行動規範がなかったから、それがなぜいけないのかっていうことを伝えられなかったんですよね。「それは差別だから」って指摘しても、「何に対する差別？　なぜいけないの？」って。でも、この規範を作ったことによって、「私たちはこういう規範の元にクラブ運営をしています。なので、それはクラブの行動規範にそぐわない行動です」っていうのをしっかり言うことができるようになったっていうのがまず一番大きいかなと思います。

――何かトラブルや問題があった時に依って立つところというか、話し合うときの軸みたいな。

**池澤**　これが私たちの一番根本の思想ですっていうところに必ず立ち返ることができるようになったっていうのはすごく大きいと思います。会長はいろんな判断をクラブの中でやっぱり求められるんですね。で、そういう時にもう一回行動規範に立ち

返ってみようとか。ある判断をするときに、じゃあ誰か取りこぼす人がいないか、誰か傷つく人がいないか、こっちに行った方がいい？　それともこっちに行った方がいい？っていうときに、会長も事務局長も理事も会員も、全員が戻ってこられる場所を作れたっていうのは大きいですね。

## ■新しいアイデアとその実現

――日本SF作家クラブの小さな小説コンテスト（通称：さなコン）、日本SF作家クラブ編のアンソロジー、SFカーニバルなど、どんどん新しいことを始められていたと思うんですけど、アイディアは会員の方々が持ち込んでくれるんですか。

**池澤**　そういうこともありますし……。なんか作家クラブって面白くって、〈広げる代〉と〈定着・固定化させる代〉とが交互に来るんですよ。第十八代会長の藤井太洋さんは、すごい広げる代でした。一般社団法人化したのも藤井さんが会長の時ですね。で、次に第十九代会長の林譲治さんの時に広げた部分の足固めをしっかりする。で、その後の私の代ですごく広げて、今の会長の大澤博隆さんがそれを固定化してくれているっていう。なんか、広げて、落ち着かせて、というのが交互に来てるんですね。私を会長に選んでくれたってことは、私の代はとにかく広げる代だなって。で、私にしかできないことってどんどん切り込んでいって、その向こうにあるものを掴んで持って帰ってくること。あと、声が大きい（笑）物理的にではなくて、影響力としても声が大きい。なので、その発信力の強さだったり、声の大きさを使って、外にどんどん伝えていくことっていうのが私の役割だなと思ってやってました。そうやってやってたら、「そんな面白そうなこと考えてるんだったらうちやりたいです」とか、「それ乗ります」とか、どんどん縁が繋がっていった感じですね。だから、アイデアを考えて持ち込んだのと、うちとこれやりませんかって持ってきていただいたのと、両方ある感じです。

――藤井太洋さんも影響力という意味で声が大きいし、顔も広い方ですよね。代々の会長のキャラクターや得意なこととセットで、クラブが発展していくんですね。

**池澤**　そうですね。私だったら「頼もうー！　こういうものです。なんか楽しいことやりませんか。オッケー。ありがとうございます」みたいな、そんな感じでした。

それから、（会員同士のコミュニケーションに使っている）Slackの中に、アイデアボックスというチャンネルを一個作って、そこに実現可能・不可能なんでもいいから思いついたことをみんなでガンガン投げ入れていったんですよ。　みんなどんどん書き込んでくれて。で、それを折に触れて一回見直して、これできるんじゃないとか、これとこれ繋げられるよねとか、これとこれ組み合わせたらもしかしたらうまくいくかもしれないとか、なんかそういうのを一個ずつやっていったら、できることが増えていったっていうところもあります。

――一方で、新しいことをどんどんやるに

は、膨大な事務仕事とか裏方仕事が発生するじゃないですか。楽しいことをする場を作るためには準備が綿密であることが大事だったりすると思うんですけど、その実務

## 私が「これ無理。誰か手伝って」って言います。

面はどんなふうに運用してたんですか。

**池澤**　すごい単純で「無理だったらやめよう」です。誰かの犠牲の上に成り立つんだったらやめようって。どんなにいいアイデアでも、誰かが無理をしたり、無茶をしたり、その人がいないともう回らなくなるような組織は正しくないので、「私が死んでも代わりはいるものシステム」って言ってたんですけど。

　って言いつつ、みんな抱えて突っ走っちゃうっていうか……。私が誰よりも、ラグビーで言うんだったらボール持ってゴールに突っ込んでいくタイプだったので（笑）後ろ振り返ると誰もいない、ごめん、でもボール持ってるから行っちゃうね、みたいな（笑）

　そういうこともあったんですけど、でも基本的に誰かが無理をしてそうだったら必ずサポートをつける。で、「無理です」、「できません」、「助けてください」をいかに言いやすいシステムにするかっていうのはすごい気を配ってました。

――SOSを言いやすいシステムって具体的にどんなことですか。

**池澤**　私が言います。

――池澤さんが「大丈夫ですか?」って声をかける……?

**池澤**　ううん、私が「これ無理。誰か手伝って」って言う。

――なるほど！　会長も言うんだったらみんなも言える、みたいな。

**池澤**　すっごい小っちゃいことから言うんですよ。例えば「メールを出さなきゃいけないんだけど、すごい苦手な内容だから、誰か文面考えるの手伝って」って。で、考えてくれたら「ありがとう。これで出せる。すごい助かった。次なんかあった時お礼するから言ってね」って。

――すごい。恩を売るのの逆みたいな。恩を買うことで、次こちらから恩を渡しやすくするみたいな。

**池澤**　事務局長ともそれはすごいやって。事務局長が苦手なことと私が苦手なことが違うので、「事務局長これ苦手でしょ。じゃあ私やるよ」って。例えばメール書くのとかでも、同じ事務局のアドレスから出すから、誰が書いたかとか関係ないから、「私書いとく。その代わりこっちお願い」とか、そういう交換をよくやっていました。誰かの得意と誰かの不得意を気軽に交換できるようなシステムにしておくとストレスがないなと思ったので。不得意だと思ったり、これは難しいと思ったらすぐに手上げて誰か助けてくださいって言えるようにしてました。

――それ、大事ですね。

**池澤**　私は個人的にメール専門のマネー

ジャーを雇っているんです。メールが苦手なので。私が書くとなるとエネルギーが一〇必要だけど、メール得意な人は一で済むじゃないですか。だったら一の人に投げる。クラブの運営もそんな感じで、誰かが抱えてブラックボックス化しないように。なので、Slackにすぐ投げるとかして、連絡はすごく緊密に取ってました。

## ■ウクライナに関しての声明文

――ロシアによるウクライナへの侵攻に対して理事と有志で声明を出されたと思うんですけど、世界の情勢に対して日本SF作家クラブが声明を出すのはイレギュラーなことですよね。

**池澤**　だと思います。そもそも声明自体をそれまでにクラブから発出したことがなかったと思います。

――今回それを初めてしようと思った理由をお聞かせください。

**池澤**　SFはやっぱり社会と関係してるからですね。全然他人事ではなくて。これだけ世界が動いていく中でSFだけが「うちは関係ないです、フィクションなので」とは言っていられない。逆にSFだからこそ社会の動きに敏感でなければいけないし、見えなくなってしまっているかもしれないものに対して無頓着であってはいけない。誰かを踏んでいたり、踏んでいる足の下のことに気がつかないっていうことは許されないと思うので。

ただ、気をつけていたのは、あの声明を理事と会員有志という形で出すという点です。実際、会員からはロシアが正しいという声もあったんです。声明の文責を日本SF作家クラブ一同にしてしまうと、そういう人たちの立場を私たちは逆に踏みにじることになってしまうので、基本的にはああいう声明は「有志」にしています。

――声明はどうやって出されるのですか。

**池澤**　ウクライナへの侵攻に対する声明発出の流れを全部まとめて、声明発出用のプロトコルを作ったんですね。チャートが分岐になっていて、こういう時は声明を出す／出さない、その声明はどういった形で出す、というような。

**SFだからこそ、社会の動きに敏感でなければいけない。**

そしてクラブの中でオープンコメント期間を設けて、そこでものすごい話し合いをします。この間のAIに関する声明もそうなんですけど、理事会でベースを作って、それをクラブの会員に公開して、質問点、疑問点や直してほしい点をあげてもらう期間を一ヶ月とか取って、そこで徹底的に話をします。で、できれば詳しいオーソリティに見てもらって直してもらってっていう段階を踏みます。時間かけられるものは時間をかけます。

ただ、あのウクライナの声明に関してはスピードが大事っていうのもすごくあったので、一晩で作り上げました。ただ、その間にSlackで交わされた文章の文字数は多

分二万文字以上だったと思います。みんな徹夜で朝まで話し合いをして、細かいとこまで磨き上げて、で、あの形で出しました。

## ■五十名以上の会員の増加

――任期中に五十人以上会員が増えていますよね。若い作家さんとか新しい書き手の方が多かったと思うんですけど、クラブの雰囲気、変わりましたか。

**池澤**　そうですね。以前とは全然違うかもしれないです。特に交流がSlackになって、Slackをみんなすごい気軽に使ってくれるんですよ。雑談だったりとか自分の日記を立ち上げる人もいて。

――Slackで日記？

**池澤**　そう。自分の日記を立ち上げるのは、割とベテランの方とかがやってくださっていて。長山靖生さんとかがご自身の考えを述べるチャンネルを立ち上げたりとか、荒巻義雄さんとかも雑談によくいろんなことを書いてくださっていて。そこで荒巻さんが書いたことに、若手の十三不塔さんとかが返事をしたりしてて。私もこの間、荒巻さんにChat GPTとかああいうものはどうなのかねって言われたから、意外と使ってみたら便利なんですよ。私は書くときに下調べしてもらったりとか、あと架空の企業名を考えてもらったりとか。そしたらこないだDM来て、Chat GPTいいね。これで一本小説書こうとしてるんだよ。ありがとう。ってきたんですよ。なんかそういう交流は年齢とか立場とか問わずにどんどん活発になってきてて、新しい方々がSFカーニバルで他の人のサイン会のお手伝いを自発的にしてくださってたりとかがすごいあって、楽しいです。

――アットホームな作家クラブですね。新しく入った五十名の方々は池澤さんが声をかけたんですか。

**池澤**　みんな不思議でね、じっと目を見て「クラブに入りますか」って聞くと、「うん」って言ってくれるんですよ（笑）あとSFカーニバルの後とかもすごい増えるんですよね。入った人が、この人も入りたいって言ってるんでって連れてきてくださったりすることもあって、一気に増えました。

あと、門田充宏さんがウェルカムキットを作ってくれたんですよ。そのウェルカムキットに、クラブってこういうところです、こういう活動をしています、行動規範がありますって全部載っけてるんですね。それをお渡しして考えていただくきっかけにしています。前はクラブに誘われても、会費年を一万円払って何してもらえるの？　どういう人がいるの？　怖い。ちょっとやだ。ってなってたけど、ウェルカムキット見ると、あーなるほどなるほど、これだったらそんな負担にならないし、ベネフィットはありそうだし、じゃあ入ってみようかなって。実際の動きにつながることも増えました。

――作家クラブ主催で学習会とかされたりもしてますよね。

**池澤**　白い鹿の亭で〈白鹿亭〉。博士課程にもかけてるんですけど、外部のオーソリティの人を呼んで、例えば空港で、コロ

ナとか病気が入ってくるのを最前線で見ていた検疫の方を呼んでお話を聞いたりとか、あと、インボイスに関して税理士の方に教えていただいたりとか。宇宙で暮らすにはどういう風にしたらいいのかみたいな話を宇宙生理学の方に聞いたりとか。認知科学、認知心理学、認知とは何か、みたいな話とか。そういうのを定期的に会員向けにやっています。いろんな方にお話を聞いたりもしてます。会員だとその時に参加できなくても、アーカイブで見られるんですよ。

――〈白鹿亭〉、めちゃくちゃいいなって思っていました。そろそろ時間なので最後に一つだけ。日本SF作家クラブ以外にこんなSF団体が日本にあったらいいなっていう団体はありますか。

**池澤**　作家クラブ以外……。今、日本SF作家クラブは作家クラブといいつつ作家じゃない人たちも入っているので……。団体としてまとまって情報交換をして救いになってほしいのは、編集者の方たちですかね。編集者の方、大変そうなので。日本SF編集者クラブ。互助会として、ここのマッサージが安くていいよ、とか。実際、編集者の方がいないと本も出せないし、本の質も上がらないので。今、スター性のある方々に頼っちゃうところが大きいじゃないですか。この出版社のこの編集さんみたいな。

――名物編集者みたいな。

**池澤**　そう。じゃあ、その人のあとどうなるんだろうとか、出版社の中でSF担当が一人しかいなくて、全てを背負って一人で頑張ってる方とかもいらっしゃるので、そういう方たちが倒れないようなシステムを作って欲しいっていうのはあるかも。健康で無理せず長生きして、いい本をいっぱい作ってほしいですね。関わる人全員が。

――本当にそうですね。貴重なお話ありがとうございました。

（二〇二三年一一月十九日　聞き手・井上彼方）

池澤春菜
声優・作家・エッセイスト。二〇一〇年から『S-Fマガジン』に連載している「SFのSは、ステキのS」を、『SFのSは、ステキのS』、『SFのSは、ステキのS＋』（いずれも早川書房）として刊行。『現代SF小説ガイドブック　可能性の文学』（ele-king books）を監修。二〇二一年に小説家としてデビュー。『2084年のSF』（ハヤカワ文庫JA）や『NOVA　2023年夏号』などに短編小説を寄稿している。二〇一三年から日本SF作家クラブの会員。

池澤春菜さんに創作のお話を伺ったインタビューをKaguya Planetのウェブ版にて公開中。
https://virtualgorillaplus.com/interview/haruna-ikezawa-2023/

次号
2024年4月

# 特集 気候危機

## 編集後記

二〇二四年、Kaguya Planetは三周年を迎え、マガジンを刊行します。Kaguyaという名前にちなんで、創刊準備号である0号のテーマは〈月〉にしました。これまでのKaguya Planetで〈月〉に関連する作品をいくつかピックアップして収録しています。

堀川夢さんのブックレビュー、齋藤隼飛さんと鯨ヶ岬勇士さんのコラムを読んで「月」というものが持つ意味について考えながら改めて収録作品を読むと、各作品の読み味が違ってくるようにも思います。マガジンとして、Kaguya Planetという「場」で作品を発表する楽しさを味わっていただけたらと思います。

Kaguya Planetは「気候危機」特集、「パレスチナSF」特集と続きます。未来を舞台にしたSF作品において、地球の環境が今後どうなっていくのかという視点は欠かせないものです。パレスチナ問題はなぜ一九四八年からずっと解決されずにいるのか。そこにある文化と語りの不均衡に対して、SF企業としてすべきことを考えます。

Kaguya Planetという場所が、一人でも多くの人が安心してフィクションを楽しめる場所でありますように。皆様からの応援と、至らぬことへのご指摘、どうぞよろしくお願いいたします。

井上彼方

Kaguya Planet
0号　2023年12月
2023年12月26日発行

編集人　井上彼方
発行人　井上彼方
発行　VGプラス合同会社
〒556-0001 大阪府大阪市浪速区下寺2丁目6-19 ヴィラ松井4C
info@virtualgorillaplus.com
https://virtualgorillaplus.com/kaguyaplanet/
表紙　浅野春美
デザイン　浅野春美、VGプラスデザイン部

本書の無断複製は著作権法上の例外を除き禁じられています。各コンテンツの著作権は著者に帰属します。